

国際子ども図書館 の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第 11 号
2011.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

国際子ども図書館の歩み：2000年～2010年

※講師等の所属・肩書は当時のもの。

2000年 部分開館



2000年5月5日 部分開館



2000年5月8日 開館記念国際シンポジウム
「子どもと本と読書—21世紀の子どもたちのために今何をなすべきか」



2000年3月31日
「子どもの本の日／国際子ども
図書館開館記念」記念切手発行



2000年5月6日～6月4日
開館記念展示会「子どもの本・
翻訳の歩み展」



2001年6月22日 来館者10万人突破記念式典

2002年 全面開館

2002年1月1日 国際子ども図書館シンボルマーク決定



2002年5月4日 全面開館記念行事でのテープカット



2002年5月5日 全面開館



2002年7月8日 全面開館記念シンポジウム「昔話から物語へ」



2002年から開始したおはなし会、科学あそび、
おたのしみ会、学校図書館セット貸出し



2004年4月
「ちいさな子どもの
ための絵本の時間」
開始（2008年、「ちい
さな子どものための
わらべうたと絵本の
会」と改称）



2004年5月22日
講演会「パンチャタントラ：世界で
最古の子どものお話集」マノラマ・
ジャファ氏（国際児童図書評議会
（IBBY）インド支部事務局長・イ
ンド児童文学者）

館内見学ツアーの様子



2004年10月18日～20日
第1回児童文学連続講座の様子



2007年7月7日
講演会「多文化社会における児童書・児童サービス」パトリシア・アルダナ氏（国際児童図書評議会（IBBY）会長）



2007年11月21日 平成19年度児童サービス連絡会
（平成19～21年度開催）



2008年9月27日
講演会「松居直氏に聞く
一絵雑誌・子ども・絵本」
松居直氏（社団法人日本
国際児童図書評議学会
会長）



2008年10月9日 国際子ども図書館100万人来館記念式典

2009年10月24日
講演会「本と子どもと大人をつなぐ場
所“本の城”(IJB)での20年」ガンツェ
ンミュラー文子氏（ミュンヘン国際児
童図書館日本部門嘱託、前東アジア部
門担当）



2010年（開館10周年）

開館10周年及び国民読書年記念行事

2010年2月20日～9月5日
 展示会「日本発☆子どもの本、
 海を渡る」p.14～16



2010年8月21日～9月12日
 展示会「世界のバリアフリー絵
 本展—国際児童図書評議会
 2009年推薦図書展」p.18～19



2010年9月18日～2011年2月6日
 展示会「絵本の黄金時代1920～1930
 年代—子どもたちに託された伝言」
 p.16～17



(左) 2010年5月5日
「子どものための落語会」
古今亭菊之丞師匠 p.19

(右) 2010年10月24日
読み聞かせ講座「親子で楽しむ
昔話」山根基世氏、好本恵氏
(ことばの杜) p.20



2010年9月25日 「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？（第2回）」



(右から) ジャクリーン・ウィル
ソン氏 (作家)、さくまゆみこ氏
(翻訳家)、野上暁氏 (日本ペン
クラブ「子どもの本」委員会委員
長) p.25

2010年11月27日 シンポジウム「絵本の黄金時代 1920～1930年代—アメリカとソ
ビエトを中心に—」

(右から) ヴェレナ・ラ
シュマン氏 (元スイス児童
・青少年メディア研究所付
属ヨハンナ・シュペーリ文
書館学芸員)、レナード・
マーカス氏 (アメリカ児童
文学評論家)、島多代氏 (社
団法人日本国際児童図書評
議会会長) p.53



国際子ども図書館の館内

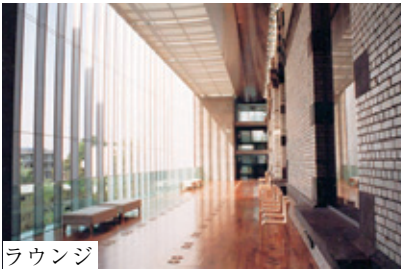
3階



本のミュージアム



ホール



ラウンジ



大階段

2階



第一資料室



第二資料室

1階



子どものへや



世界を知るへや

国際子ども図書館開館10周年にあたって



国立国会図書館に設置された国際子ども図書館は2010年に10周年を迎えました。設立以来、国内外の児童書や関連する資料を積極的に収集し、広くこの分野の調査研究を支えるとともに、子どもたちが本と触れ合う場を重視し、年齢の制限なしに誰でもやって来て児童書を読み、我々が行う子どものおはなし会を楽しんでいただき、また種々の興味ある展示会や講演会に参加していただいております。学校図書館に対しては図書セット貸出し事業を展開するとともに、児童書関係の図書館サービスができる人材の育成にも力を入れ、各地から参加者を集め研修や講演会、シンポジウムなども行ってまいりました。こういった努力の結果、国際子ども図書館は国内外にその価値をよく認識され、海外からの訪問、視察の方々も増えてきております。

最近各国の国立図書館を中心に世界的に図書の電子化が進展し始めております。国際子ども図書館におきましても開館当初から「絵本ギャラリー」と称する絵本の電子展示を音声や音楽も入れて行っていますが、これらの内容をさらに充実させ、小学校の教室や図書室でも利用していただけるよう文部科学省とも連携を取りながら広く周知してゆくことが大切です。文部科学省では電子教科書の導入を検討しておりますが、これに対応してゆくことが我々にも必要なことであります。

図書館界、出版界は今日変革の時期にあります。国際子ども図書館においても、こういった動きをよく把握しながら、将来の在り方を考えて進んでゆこうとしておりますので、よろしくお願い致します。

2011年 3月

国立国会図書館長 長尾 真

希望を育むということ



国立初の児童書専門図書館の誕生を祝って、2000年5月5日に皇后陛下の御臨席の下、国際子ども図書館開館記念式典が盛大に挙行されてから、早いもので10年の歳月が過ぎました。2010年は開館10周年及び国民読書年記念行事として、三つの展示会と六つのイベントを開催しました。また、国内外の関係諸機関の皆様から心温まる祝賀メッセージを頂きました。

2010年はさらなる飛躍に向けて新たなスタートを切った年でもあります。日本ペンクラブ「子どもの本」委員会との共同企画による講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」もその一つです。また、インターネットによる情報発信を強化するために「国立国会図書館キッズページ」や「子どもと本をつなぐ人のページ」を立ち上げ、メールマガジンの配信も開始しました。懸案であった施設の増築もようやく着工の目途が立ちました。竣工は2015年度の予定です。それまでの期間に取り組むべき活動を明らかにするために「子どもの読書活動推進支援計画2010」を策定・公開しました。

「児童文学とは希望の文学なのです。」—10周年記念行事の最後を飾った国際シンポジウムでアメリカの児童文学評論家レナード・マーカス氏はこう要約されました。読書を通して子どもたちの心に希望を育む—これが子どもの本に係わる私たちの共通の願いであり、そのために、これからも皆様のお力を借りながら、国際子ども図書館ならではの活動に取り組んでいきたいと思えます。

2011年3月

国立国会図書館国際子ども図書館長 齋藤 友紀子

国際子ども図書館の窓 第11号



<目次>

【口 絵】

【国際子ども図書館開館10周年にあたって】 =長尾 真 1

【希望を育むということ】 =齋藤 友紀子 2

【開館10周年に寄せて】

次の10年に向かって =齋藤 友紀子 4

国際子ども図書館への期待 =堀川 照代 9

開館10周年及び国民読書年記念催物 14

【2010年のハイライト】

国際子ども図書館の情報発信 =五十嵐 麻理世 21

シリーズ・いま、世界の子どもの本は? =企画協力課協力係 24

児童文学連続講座「日本の児童文学者たち」 =宮川 健郎 26

電子展示会「絵本ギャラリー」『『コドモノクニ』掲載作品検索』

への画像追加 =企画協力課企画広報係 29

【国際交流】

本の文化を築く～インド・ニューデリーで開催の児童図書館国際会議
=石川 真理子 30

世界の仲間に聞いてみよう!～スウェーデン出張報告 =小林 直子 32

第32回 IBBY 世界大会に参加して =青山 真紀 34

韓国国立子ども青少年図書館との交流事業
=企画協力課協力係、児童サービス課 36

【コラム】

桃太郎とロシア革命～スウェーデン語版ちりめん本『桃太郎』を
めぐって =酒井 貴美子 38

【調査・研究報告】

トルコの児童書 =片桐 早織 39

ベトナムの児童書事情 =加藤 栄 44

【活動報告】

【これから…】 60

【数字で見る!国際子ども図書館】 61

【グラフで見る!国際子ども図書館】 66

【国際子ども図書館利用案内】 68

【『国際子ども図書館の窓』第1号～第10号総目次】 69

次の10年に向かって

齋藤 友紀子

『国立国会図書館月報』590号（2010年5月）で、国際子ども図書館の誕生によって国立国会図書館のサービスにどのような変化が生じたのかを中心に、これまでの10年間の歩みを振り返ってみたので（注1）、ここでは、PDCA サイクルで言えば **Check**（評価）と **Act**（改善）に当たる近年の国際子ども図書館の取組について、今後の展望も含めて報告しておきたい。

国際子ども図書館の社会的役割

2009年12月に「国際子ども図書館中期活動方針2009」（以下「中期活動方針」という。）を策定し、国際子ども図書館の基本的役割を次のように再整理した。

(1) 児童書専門図書館としての役割

国内外の児童書及び関連資料を広範に収集・保存・提供するとともに、調査研究、研修、情報発信等を通して、児童書や子どもの読書にかかわる多様な活動を支援する。

(2) 子どもと本のふれあいの場としての役割

国内外の児童書の提供、各種催物、見学、情報発信等を通して、すべての子どもを対象として図書館や読書に親しむきっかけを提供する。

(3) 子どもの本のミュージアムとしての役割

児童書に関する展示会やそれに関連した講演会、各種イベント等を通して、児童書の持つ魅力を広く一般に紹介する。

一般書に比べて散逸、消滅しやすい児童書の将来にわたる利用を保障するために、国レベルの児童書センターを設けている国はいくつかあるが、保存を前提としていることから、子どもをサービス対象としている所は少ない。また、自国や自国語の児童書の他に、国際的な視野に立って世界各国の児童書を広範に収集しているのはおそらく、国際子ども図書館とそのモデルともなったミュ

ンヘン国際児童図書館が双壁であろう。約120か国40万冊の質量共に優れた児童書コレクションを僅か10年で構築したことは、国際子ども図書館の大きな成果と言える。

このような国際的な児童書専門図書館としての役割に加えて、子どもへの直接サービスを実施し、かつミュージアム機能も持つという点が、世界的に見た国際子ども図書館の大きな特徴であり評価も高い反面、サービス対象が拡散して焦点を絞きれない要因にもなっている。また、国内的には、子どもの読書活動推進の拠点としての役割も期待されており、この期待にどう応えるかが設立以来の大きな課題となっている。

施設的な限界への対応

既存の歴史的建物に複合的な機能を盛り込んだことに起因する国際子ども図書館の施設的な限界については、当初から指摘されていた。建物の改修を終え2002年5月に全面開館したが、早くもその翌年の2003年3月に、「国際子ども図書館を考える全国連絡会」^(注2)から施設の改善と新設に関する要望書が提出されている。また、2005年3月に提出された「国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会答申」では、40万冊の収蔵能力を持つ書庫が2012年度には満架を迎えることから、新館を増築して新たに100万冊規模の書庫を増設するとともに児童書専門図書館としての機能の充実を図り、本館では他の二つの機能に係るサービスの拡充を図ること、この機会に余りに狭隘な執務環境の改善を図ること等を提言している。

この答申を受けて、国立国会図書館では、隣接する旧宿舍を取り壊して新館建設用地を確保し、各種調査を経て、2009年度から増築・改修のための設計作業を進めている。2015年度の竣工を目指しているが、増築・改修が予定どおり実現すれば、国際子ども図書館に課せられた社会的役割を果たすための施設的要件が開館15年目にしてようやく整うことになる。研修室やグループ研究室が整備されれば、国内外からの研修生や研究生の受入れ、団体見学への対応や、グループでの研究や選書活動など、これまで施設的に対応できなかったサービスも新たに可能となる。また、子どものためのスペースの拡充によって、子ど

もの発達段階に応じたよりきめの細かいサービスの提供が可能となる。

前述の中期活動方針は、施設の増築・改修が実現するまでの過渡期における国際子ども図書館の活動の方向性を示したものである。この期間は、来館サービスの効率化を図ることで、施設的な制約の少ないインターネット等を活用した情報発信サービスの充実に力を注ぐとともに、特に子どもの読書活動の推進を第一線で担う公共図書館、学校図書館、文庫等に対する支援を強化することとした。

東京本館・関西館との一体化の推進

国立国会図書館は、東京本館、関西館、国際子ども図書館の三施設が一体となって、国会議員、行政・司法の各部門及び国民に対する図書館サービスを行っている。館全体の業務・サービスの効率化の観点から、三施設の情報システムの一体化を進め、費用対効果の向上を図ることを目標として、2008年3月に「国立国会図書館業務・システム最適化計画」（2010年10月改訂）を策定した。国際子ども図書館は、他の二施設に先駆けて電子図書館事業を展開してきた経緯もあり、これまで独自に情報システムを開発・運用してきたが、この計画に基づき、館全体のシステムに順次統合することとなった。現在、2012年1月の本格稼働を目指して、国立国会図書館業務基盤システムなどの新システムの導入準備を鋭意進めている。児童書デジタルライブラリーは2010年度に近代デジタルライブラリーに統合された。児童書総合目録は2012年1月までに情報探索サービスシステムに統合する予定である。また、児童向け OPAC の検討も進めている。レファレンス系システムについては、既に2009年度に導入されたナレッジベースを活用して業務や情報発信の共有化を進めている。東京本館及び関西館では既に実施している館内におけるインターネットやオンラインデータベース等の電子情報の提供も、2011年度には可能になり、国立国会図書館全体で現在大規模に進めているデジタル化資料の閲覧やプリントアウトも可能となる。

このように、これまで国際子ども図書館単独では実現が困難であったサービスが可能となる条件が整うこととなるが、前述したような施設的な制約により

機器類の配備も十分にはできないため、2012年1月の新システム導入は小規模とならざるを得ない。新館に児童書総合閲覧室（仮称）が完成した暁には、より充実したサービス提供が可能となる見込みである。

「子どもの読書活動推進支援計画2010」

最後に、2010年9月に策定・公開した「国立国会図書館国際子ども図書館子どもの読書活動推進支援計画2010」について紹介する。この計画は、子どもの読書活動の推進を第一線で担う全国の公共図書館、学校図書館、文庫等の児童サービス関係者を対象としたもので、2014年度までに取り組むべき活動を次の三つの項目別に示している。

- (1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築
- (2) 人材育成支援
- (3) 学校図書館への支援

(1)については、2010年3月末から4月にかけて立ち上げた、ホームページの「子どもと本をつなぐ人のページ」と「国立国会図書館キッズページ」、そして「国際子ども図書館メールマガジン」のコンテンツの充実のほか、児童向けOPACの開発・提供、中高生向けの情報提供、調査研究プログラムの企画・実施、児童サービス協力フォーラムの開催に取り組む。このフォーラムは、2007年度から3か年にわたり開催した児童サービス連絡会の成果を踏まえて、都道府県立図書館による児童サービス支援の在り方についての意見交換・相互交流の場として2010年度から3か年の予定で開催するもので、第一回は研修をテーマとして取り上げる。(2)については、従来の児童文学連続講座や講演会・シンポジウムなどの来館型集合研修に加えて、遠隔研修や派遣研修などの充実を図る。(3)については、これまでは学校図書館セット貸出しを中心として行ってきたが、より幅広い資料や情報の提供を図るため、2010年8月から遠隔複写サービスに加えてレファレンスサービスについても国立国会図書館全体で取り組むこととなった。学校図書館からの要望が高いNDCを含む新着図書情報の迅速な提供も今年度中には実現する見込みである。また、テーマに沿った調

べ方案内やレファレンス事例などの情報発信及び情報の共有化を進める。

フランスの歴史家、ロジェ・シャルチエ氏は、2010年9月に国際子ども図書館を訪問された際、バーチャル世界が拡大する一方で、書物に触れる場、講演会や展示会などの教育の場としての図書館がこれからますます重要になるとおっしゃっていた。その意味では、国際子ども図書館の複合性は未来の図書館を先取りしているとも言える。いつでもどこでも誰でも利用可能なバーチャルな図書館サービスの充実を図りつつ、本と人、人と人をつなぐ魅力的な場としての機能も増築・改修を機にさらに充実させていきたいものである。

(さいとう ゆきこ 国立国会図書館国際子ども図書館長)

(注1)「国際子ども図書館 これまでの歩みとこれから」

(<http://www.ndl.go.jp/jp/publication/geppo/>)

(注2) 1995年に結成された「国立の国際子ども図書館設立を推進する全国連絡会」が2000年に名称変更したもの。児童書や子どもの読書等に係る多くの専門団体や個人が加盟している。

国際子ども図書館への期待

堀川 照代

1. はじめに

2000年に開館した国際子ども図書館は、この10年間、道なき道を勇往邁進してきた。期待され成果を求められ猪突猛進してきた。突然に子どもをも対象にせざるを得なくなった館員の方々のとまどいと御苦勞は、並大抵のことではなかったはずである。

1995年11月の「国立国会図書館に設置する児童書等の利用に係る施設に関する調査会」答申を受け、1996年5月に『「児童書センター」(仮称)基本計画』が策定され、2000年5月5日に一部開館した国際子ども図書館は、2012年度に書庫が満杯になるという。それも視野に入れて、「国際子ども図書館の図書館奉仕の拡充に関する調査会」答申が2005年3月に出された。それには、次のように三つの柱と五つの重点項目が示されていた。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 児童書専門図書館としての機能 (大人へのサービス)<ul style="list-style-type: none">①資料・情報センター機能の高度化②調査研究機能の推進③子どもの読書に対する新たな役割(2) 子どもと本のふれあいの場としての機能 (子どもへのサービス)<ul style="list-style-type: none">④読むことに加え調べることの位置付け(3) ミュージアム機能の展開<ul style="list-style-type: none">⑤3つ目の柱としてのミュージアム機能の新たな位置付け |
|--|

この中の③と⑤には「新たな役割」「新たな位置付け」という語が見られ、④には「…に加え…の位置付け」とある。この答申から既に5年余りが経過しており、国際子ども図書館はこれらの項目について着実に歩を進めている。

本稿では、11年目を迎えた国際子ども図書館の10年間を振り返り、同館を支えている力を改めて確認し、国際子ども図書館の活動状況を概観し、今後の「新たな…」の可能性を探ってみたい。

2. 国際子ども図書館を支えている力

1993年3月に「子どもと本の出会いの会」が、同年12月に「子どもと本の議員連盟」が設立された。前者は読書環境を作っていく運動も起こす必要性を感じて政治や行政に働きかけ、その結果、後者が超党派で設立された。後者の当初の目標は、学校図書館法の改正と子どもの本の館の設立であったという。

そして1995年5月には「国立の国際子ども図書館設立を推進する全国連絡会」が組織され、それに呼応して同年6月に「国際子ども図書館設立推進議員連盟」が組織された。これらの力は大きく、「初めは100年かかると言われたんですよ。でも、1995年に国際子ども図書館設立推進議員連盟が発足してから、たった5年で開館したんです。」^(注1)というほどである。この2組織は、国際子ども図書館が開館した2000年にそれぞれ「国際子ども図書館を考える全国連絡会」と「子どもの未来を考える議員連盟」に改組した。

この民間団体と政治に直接関わる議員団体との結束力に支えられて、国際子ども図書館は前進してきた。「国際子ども図書館を考える全国連絡会」は、要望書、フォーラム、講演会、調査報告という方法で同館を支援している。

2008年10月に開催された「国際子ども図書館の増築計画を考える緊急フォーラム」の後援団体を見ると、「図書議員連盟、活字文化議員連盟、(財)文字・活字文化推進機構、子どもの読書推進会議、(社)日本書籍出版協会、日本児童図書出版協会、(財)出版文化産業振興財団」という多くの名称が挙がっている。子どもと本の文化に関わる人々の願いは深く強い。

3. 現在の活動状況

『国際子ども図書館の窓』の毎号巻末に、1年間の「活動報告」が掲載される。それは、「1. 展示会、2. イベント、3. 児童サービス、4. その他、5. 刊行物」に分類されているが、資料収集等の業務をも含めて、①「児童へのサービス」、②児童資料に関わる「図書館の図書館としてのサービス」、③「ミュージアムとしてのサービス」の三つに分けて、同館の業務の全体像をまとめてみたものが図1である。

国際子ども図書館では、児童書及び児童文学・児童サービス関連資料が収集

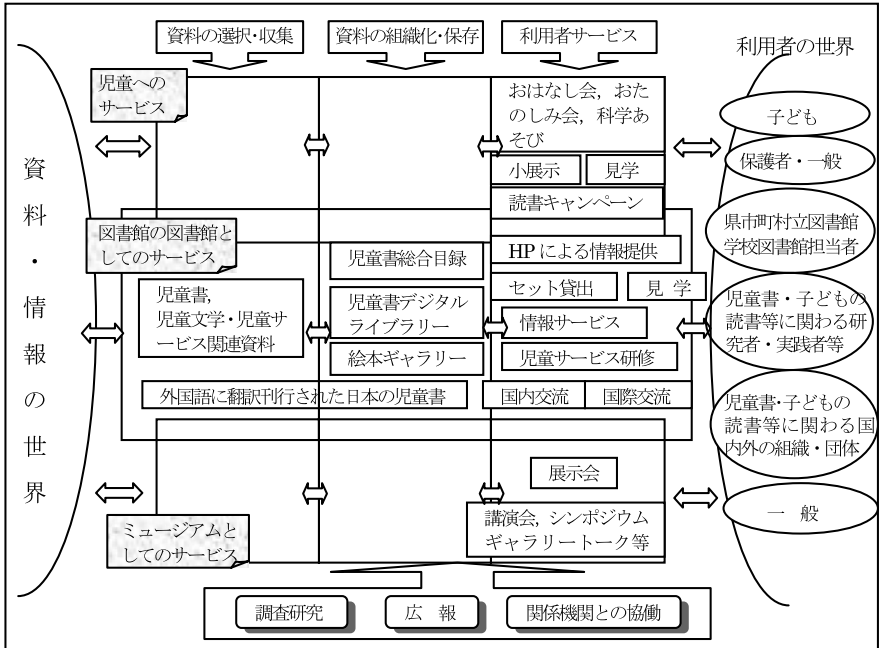


図1. 国際子ども図書館の業務の全体像

され、児童書総合目録が作成され、資料のデジタル化が進められている。とくに「外国語に翻訳刊行された日本の児童書」事業を2000年1月に JBBY から引き継ぎ、海外翻訳児童書と翻訳出版情報を収集している。HP では実に多様な情報を提供している。学校図書館向けにはセット貸出しを実施している。児童サービス担当者を対象とした研修「児童文学連続講座」を開催し、その記録を発信しているのも有用である。図書館総合展や学校図書館全国大会などに参加し、IFLA 大会や IBBY 大会などに職員を派遣して国内外の交流を図っている。

所蔵資料を活用した展示会では、専門家に監修を依頼したり、他機関と共催したりしている。展示会資料貸出し、巡回展示を行ったこともある。

2002年度から「国際子ども図書館連絡会議」を開き、同館と協力関係にある15前後の機関から意見聴取等を行っているが、2007～2009年度は、県立図書館9館と「児童サービス連絡会」を開き、児童サービスの現状・課題を探った。他に、児童への直接サービスとして各種催物が活発に実施されている。

4. 今後に期待したいこと

(1) 子どもの読書状況への対応・啓発

2010年12月に、OECDの「生徒の学習到達度調査（PISA）」の2009年度調査結果が発表された。新聞紙上には「日本の学力改善傾向」という文字が躍り、「科学的応用力」「数学的応用力」「読解力」とも前回の2006年調査より得点が増加し、読解力は15位から8位に上がったことが報じられた。全国学校図書館協議会と毎日新聞が毎年実施する読書調査では、2010年5月の1か月間の平均読書冊数が小中高とも昨年より伸びた。中学生の4.2冊は過去最高の冊数である。

これらの結果を見ると、読書に対する各地の取組が効を奏しているように見受けられる。しかし中学生の約半数は2冊以下であり、読む生徒と読まない生徒の差が拡大しているという^(注2)。眼前の順位や数字に一喜一憂することなく、真に子どもが自立した読者に成長するように展望を持った取組をしていかなければならない。

国際子ども図書館には、特に読書啓発に力を入れていただきたい。例えば、子どもから大人を巻き込んで「私が選ぶ今年の1冊」を、家庭からでも各図書館からでもメールで投稿できるような全国キャンペーンを張ることもできる。また、同館の「子どものためのおはなし会」では大人の入室は遠慮してもらっているというが、その間に同時進行で保護者向け読書啓発講座が実施できる。

(2) 実践と理論をつなぐ

国際子ども図書館は、実践と理論を結ぶ場であってほしい。子ども向けお話し会などの直接サービスは実践する場であるが、同館職員や研究者、学生などが、例えばそれを参加観察することによって研究する場ともなる。

既述の「児童サービス連絡会」で明らかになった課題を基に、現在、児童サービス担当者の研修に関する調査研究が進行中である。日常業務の中で職員により研究が進められていることは非常に頼もしい。近い将来、研究協力者が日常的に存在することが望まれる。

米国議会図書館の「アメリカン・メモリー」事業が、教育者や研究者から利用事例を出してもらって提供しているように、同館提供の資料や展示がどのよ

うに利用できるのかを示すことも必要である。例えば、「学校図書館セット貸出し」の利用事例の報告に加えて学習指導案付きの利用方法の提案、子どもたちが展示会を見て学んだことをまとめるための用紙（ワークシート）作成とHPへの掲載などが考えられる。

（3）ミュージアム機能と広報

現在の企画展示は大人向けのものが多い。子ども向けと大人向けの混在した展示はできないものか。説明パネルをズーッと読んでいくだけでは、子どもの興味は持続しない。家族連れの子供、旅行者、観光客、修学旅行の児童生徒などが楽しめる本の世界のアミューズメントパークを夢見ている。

「上野の森」の他の子どものための施設と連動したテーマで、セットで見回れるような企画はどうだろう。「上野の森の連絡会」とそのHPを立ち上げれば、上野に遊びに行こうと思う人は、このHPを見て1日の計画を立てることができる。時には、上野駅から同館までパネルを並べて誘導する。

（4）関係機関との協働と情報発信

上述の全国キャンペーンにしろ、利用事例やワークシートにしろ、関係機関や教育者・研究者との協働によって実現の可能性は高まる。「子どもの読書」に関わる行政機関との協働も必要である。HP上の「図書館員向けページ」で、図書館や読書の大切さを伝えるときに、何をどのように言えば相手に理解してもらえるのか、などのツールになる情報もあると役立つ。

5. おわりに

知り合いの司書教諭の方が、校内の学校図書館のある廊下を「図書館通り」と名付けている。ならば国際子ども図書館の前の道は「国際子ども図書館通り」あるいは「子ども図書館通り」とは呼べないであろうか。休日には、上野の森の奥にまで子ども連れの家族の姿があふれることを願っている。

（ほりかわ てるよ 島根県立大学短期大学部教授）

（注1）「国際子ども図書館のさらなる発展を求めて」『国立・国際・子ども図書館』

No.27、2010、p.8

（注2）「第56回学校読書調査報告」『学校図書館』No.721、2010、p.18

開館10周年及び国民読書年記念催物

国際子ども図書館は、2010年の開館10周年及び国民読書年を記念して、三つの展示会と二つの親子向けイベントを開催した（開催日数、入場者数等は49～52ページ「活動報告」参照）。

展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」（2月20日(土)～9月5日(日)）

国際子ども図書館は、2000年の開館記念展示会「子どもの本・翻訳の歩み展」で、日本語に翻訳された海外の児童書を紹介した。開館10周年記念の本展示会ではその逆に、海を渡った日本の児童書に光を当て、その国際的な広がりについて紹介した。

☆ 会場構成

3階「本のミュージアム」内を、翻訳出版件数や地域の広がりを紹介する「出版の塔」、日本の絵本や物語、昔話の海外での受容を紹介する「文化の塔」、そして「名前と鳴き声」など四つのテーマで資料を紹介する「特別コーナー」の三つに分けた。ラウンジには、絵本『ぐりとぐら』の冒頭ページを朗読とともに9種類の外国語で楽しめる「音声展示」コーナーを設けた。また、1階「世界を知るへや」で行った関連小展示において展示資料の複本等を展示し、原書と翻訳版を手にとることができるようにした。

☆ アンケート結果

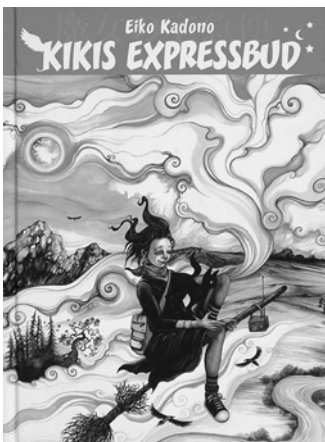
展示会の印象については、「外国でこんなにたくさん日本の児童書が出版されていて、国が違っても同じ本を楽しんでいることが分かって感動した」との感想が多かった。「読んだことのある本の翻訳本の表紙が変わっていたりして楽しかった」、「いろいろな国の文字が見られて面白かった」などの感想もあり、様々な「日本発☆子どもの本」を楽しんでいただけたようである。



韓国版 『키키의 마녀수업』
한림출판사 1994



台湾版 『魔女宅急便』
東方出版社 2006



スウェーデン版 『Kikis expressbud』
Ordbilder 2006

展示資料から：『魔女の宅急便』

(福音館書店 1985) の翻訳書。

国・地域により、表紙が原書と同じものも、全く異なるものもある。

☆ 展示解説本、電子展示会など

2月に展示解説本を刊行した。また、展示解説と一部の資料の画像を、国際子ども図書館ホームページ上の電子展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」で見ることができる。

(<http://www.kodomo.go.jp/anv10th/index.html>)

なお、8月31日(火)には、秋篠宮妃殿下の御来臨を賜った。



電子展示会

(「日本発☆子どもの本、海を渡る」展示班)

展示会「絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」(9月18日(土)～2011年2月6日(日))

国際子ども図書館では、2000年の開館以来、絵本の草創期から20世紀初頭に至るまでの発展の流れを内外の貴重な資料を交えて紹介する電子展示会「絵本ギャラリー」を制作し、これまで七つのプログラムを順次当館ホームページ上で公開してきた。今回の展示会では、その流れを継ぐものとして、世界各地で優



展示会場タベストリー

『Millions of cats (100まんびきのねこ)』

W. ガアグ作 1928 より

た絵本が多数出版された「絵本の黄金時代」と呼ばれる1920～1930年代に焦点を当て、約220点を展覧した。

なお、企画・構成に当たっては、島多代氏（社団法人日本国際児童図書評議会会長、私設絵本資料室ミュゼ・イマジネール主宰）の監修及び資料提供を得た。

展示は3章構成とし、第1章では第一次大戦後の繁栄の中で様々な出自の作家たちが多民族・多文化社会のための絵本を模索したアメリカの作品を、第2章では革命後の新しい社会の役割と希望を子どもたちに伝える手段としての絵本を多数創作したソビエトの作品を、第3章では絵本画家たちが影響を受けた19世紀末から20世紀初めの芸術潮流を象徴する作品を紹介している。この他、特別コーナーとして、同時期に刊行されたパール・カストール文庫などフランスの絵本や、マリー・ローランサンなど美術家が手掛けた絵本などを展覧した。

ロシア・アヴァンギャルドの影響が色濃い初期ソビエト絵本や、著名なアメリカ絵本作家の初期の作品など、これまであまり紹介されてこなかった作品も数多く展示され、二つの大戦の挟間に花開いた短くも輝かしい「絵本の黄金時代」の息吹を伝える貴重な機会を提供できたものと考えている。

なお、9月に展示解説本を刊行した。



『Эта книжечка моя про м
оря и про маяк
(海と灯台についての私の本)』
V. Маяковский詩、B. Покровский
絵 1927 より

(「絵本の黄金時代1920～1930年代」展示班)

展示会「世界のバリアフリー絵本展—国際児童図書評議会 2009年推薦図書展」(8月21日(土)～9月12日(日))

この展示会は、社団法人日本国際児童図書評議会(JBBY)との共催により、ホール(3階)にて開催した。開催の趣旨は、バリアフリー図書の役割や必要性についての理解を深めることである。



展示会ポスター

腰掛けて楽しむ光景もよく見られた。アンケートでは、「『さわる絵本』を実際に手に取って見ることができ楽しかった」、「障害のある方々に絵本の楽しみを伝えようとする工夫がいっぱいで、温かい気持ちになった」といった感想が多く、全体の満足度は90%と高かった。

会期中は、第一資料室、第二資料室、「世界を知るへや」におい

国際児童図書評議会(IBBY)障害児図書資料センターが、障害のある子どもたちのために選定した世界21か国の50作品を、直接手に取れるよう展示した。展示資料の構成は次のとおり。

1. 手話付き絵本、
2. BLISS (国際的な非言語絵文字システム) 付き絵本、
3. 点字付き絵本・さわる絵本・布の絵本、
4. やさしく読める図書、
5. 一般市販図書。

来場者は、各国の手話・点字が付いた絵本や人形を動かせる布の絵本、障害のある子どもを描いた図書など、一点一点手に取っては、読んだり動かしたりしていた。親子で椅子に



展示風景

ても、当館所蔵資料によるバリアフリー関連の小展示を行った。

なお、8月31日(火)には、秋篠宮妃殿下の御来臨を賜った。

(「世界のバリアフリー絵本展」展示班)

子どものための落語会（5月5日(水)）

日本の伝統芸能「落語」を通じて、子どもたちにことばの面白さを体感してもらうことを目的とし、古今亭菊之丞師匠を招いて子どものための落語会を開催した。

小学1年生以上の子どもを参加対象（小学2年生以下は保護者の同伴を必須）としたところ、小学生を中心に幅広い学年からの申込みがあり、参加者は子ども45名、大人41名の計86名であった。

会場のホール（3階）には高座と金屏風をセットして、視覚的にも落語の雰囲気を楽しめるようにした。

古今亭菊之丞師匠は、大人向けの活動のみならず、子ども番組への出演、幼稚園や小・中学校での落語公演など、子ども向けの活動にも熱心な落語家である。当日は、柳家ほたるさんが「牛ほめ」を、菊之丞師匠が「初天神^{はつてんじん}」などを披露した。子どもが登場する演目を選び、難しい言葉があってもそれを言い換えずにそのまま語るという方式であったが、子どもたちはよく反応して、笑いあふれる1時間となった。子どもたちにことばの面白さを耳で聞いて感じ取ってもらうという目的は達成されたと思われる。

また、会場では、子ども向けの落語の本を紹介するリストを配り、リストに載せた本を「子どものへや」にまとめて展示した。落語会終了後、展示された本を手にとって子どもに読み聞かせる保護者の姿もあった。

(児童サービス課)

親子で楽しむ昔話（10月24日（日））

退職アナウンサーらによる有限責任事業組合で、話し言葉講座など社会貢献を行っている「ことばの杜」の代表である山根基世氏と好本恵氏をお招きし、読み聞かせ講座「親子で楽しむ昔話」を開催した。この読み聞かせ講座は、4



山根氏による朗読

歳からの小さい子どもが参加するため時間を短くし、同じ内容のものを2回実施した。参加人数は、第1回が81名、第2回が49名だった。

山根氏による昔話『ももたろう』の朗読の後、昔話の魅力や、肉声で語る読み聞かせの意義などについての話があった。昔話は言葉やリズムの面白いものが多く、『ももたろう』の朗読に

おいても参加者に楽しんでもらうことができた。参加者のアンケートでは、「山根さんの朗読の上手さに改めて感服した」、「すぐに子どもに読み聞かせたい気持ちになった」などの感想が寄せられている。

後半の講座では、参加者に実際に朗読してもらいながら、読み聞かせをする際のポイントや注意すべき点などについて、山根氏、好本氏から分かりやすい解説があった。朗読した参加者は、読み方の上手な方が多く、家庭でも日常的に読み聞かせをしているという方がほとんどであった。解説は実際の読み聞かせに役立つ内容で、例えば参加者からの「読み聞かせをする際に抑揚をつけて読んだ方が良いのか」という質問に対しては、「あまり構えずに自然に読んだ方が良い」という回答だった。「今まで精一杯演技をしていた。これからは気を付けたい」という参加者もいた。

古くから語り継がれ、様々な魅力を持つ昔話だが、最近子どもたちに読まれることが少なくなっているようである。今回の講座で昔話の持つ魅力を紹介できたことは、意義のあることだったと思う。

（企画協力課企画広報係）

国際子ども図書館の情報発信

五十嵐 麻理世

国際子ども図書館は、児童書専門図書館としての役割を遂行するに当たり、より広範な利用者に対して、より効率的かつ効果的なサービスを提供するため、インターネットサービスの拡充に取り組んでいる。ここでは、特に情報発信において、2010年に新たに開始、あるいは強化したサービスについて紹介したい。

1. 資料のデジタル化

1月6日(水)、国立国会図書館所蔵の1955年以前に日本で刊行された児童書の全文画像を閲覧できるサービス「児童書デジタルライブラリー」に、293タイトルを追加した。これで合計1,980タイトルが閲覧できるようになった。

※なお、「児童書デジタルライブラリー」は2011年2月に「近代デジタルライブラリー」(<http://kindai.ndl.go.jp/index.html>)に移行した。

また、著作権法の一部改正(2010年1月施行)により、国立国会図書館では図書館資料の保存のために著作権者の許諾なしにデジタル化することが可能となり、4月から、1968年以前に日本で刊行された児童書約38,000冊、1970年以前の児童雑誌551タイトルを、順次デジタル化している。デジタル化した資料は国立国会図書館の三施設内で閲覧することができるようになり、このうち戦前期に刊行された児童書は著作権処理を行って、インターネットで提供する予定である。

2. 子どもと本をつなぐ人のページ

<http://www.kodomo.go.jp/mediator/index.html>

公共図書館、学校図書館、文庫等で子どもへのサービスを担当している方々(以下、児童サービス関係者)の、子どもの読書活動推進に係る取組を支援するため、3月30日(火)、「子どもと本をつなぐ人のページ」を新設した。

日本国内の各自治体が策定した子ども読書活動推進計画や子どもの読書活動に関する調査、国際子ども図書館の児童サービス事例、国内外の児童文学賞一

覧等を紹介している。「関連機関等リンク集」では、読書活動推進・児童書関係団体や児童書コレクションを有する主な図書館・大学等、約300機関を掲載している。また、主に日本国内のおおむね18歳以下の子どもを対象としたウェブサイトを集めた「キッズページリンク集」では、図書館や国の機関等が公開しているキッズページ約1,850件を掲載している（いずれも2010年12月現在）。

6月14日(月)には、「国内の研修・講座情報」として、都道府県立図書館や関連機関等が主催する子どもと本に関する研修、講座、講演会等の情報の掲載を始めた。

3. 国際子ども図書館メールマガジン

<http://www.kodomo.go.jp/profile/publications/mailmagazine/index.html>

3月31日(水)、「国際子ども図書館メールマガジン」の配信を開始した。国際子ども図書館の事業・活動について分かりやすく紹介するとともに、児童サービス関係者に役立つ情報を発信し、その活動を支援することを意図している。

現在、国際子ども図書館からのお知らせ、国際子ども図書館の展示会・イベント情報、子どもと図書館の情報、レファレンス支援コーナーという構成になっている。2010年中に19号まで配信し、国内外の登録者が1,000人を超えた。

4. 子どもと本の内外情報

<http://www.kodomo.go.jp/resource/child/index.html>

国際子ども図書館ホームページ上の「子どもと本の内外情報」では、国内外の主な児童文学賞決定のニュース、子どもと読書に関するトピック、学校図書館や児童図書館等の関連機関の動向等を掲載している。

2008年は34件、2009年は49件掲載したが、2010年は111件と、発信数を大幅に増やすとともに、内容面の充実を図っている。

5. 国立国会図書館キッズページ

<http://www.kodomo.go.jp/kids/index.html>

子どもと本のふれあいの場としてのインターネットサービスの重要性を踏まえ、子ども読書の日である4月23日(金)、「国立国会図書館キッズページ」を新設した。現在、次の五つのテーマのコンテンツがある。



①国立国会図書館を知ろう！

②国際子ども図書館を知ろう！

国立国会図書館、国際子ども図書館の役割や歴史、仕事などを紹介している。

③図書館ってなんだろう？

様々な種類の図書館や図書館ならではの道具を紹介している。

④しらべてみよう！

毎月様々なジャンルの調べものに役立つ本を紹介している。

⑤図書館じてん

小学生が図書館を初めて使うときに知っている便利な用語を解説している。

国立国会図書館キッズページは、図書館での調べ学習を本格的に始める小学校3年生くらいを主な対象としている。子どもが図書館に興味を持ち、身近な学校図書館や地域の図書館を利用するきっかけとなるように、今後もコンテンツを充実させていく。

また、子どものユーザビリティやアクセシビリティについては継続的にチェックし、一層の改善を図っていく。

今後も、利用者の方々からの御意見・御要望を参考にさせていただき、子どもの読書に関わる関係諸機関との連携に留意しつつ、また外部環境の変化に柔軟に対応しながら、情報発信の一層の改善・充実に努めていきたい。

(いがらし まりよ 企画協力課副主査)

シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

国際子ども図書館は2010年、社団法人日本ペンクラブとの共催で「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」と題する一連のイベントの開催を開始した。日本ペンクラブは2009年に「子どもの本」委員会を発足させ、子どもの本を通じた国際交流に力を入れている。

第1回「いま、世界の子どもの本は？」（6月26日（土））

シリーズ第1回では作家の角野栄子氏が開会記念講演を行い、続いて、日本の児童書の人気も高い台湾における子どもの本について、ショウ・イーファン氏（児童文学研究者）と令丈ヒロ子氏（作家）が紹介した。



角野氏



ショウ氏



令丈氏

角野氏は、人間や自然、宗教と魔女との関係について論じた。ショウ氏は、台湾における第二次世界大戦後の児童文学の歴史から最新の出版事情までを概

説した。「若おかみは小学生！」シリーズの作者である令丈氏は、台湾の小学校を訪問した際のエピソードや、台湾での自作の受け入れられ方などについて紹介した。

第2回 「いま、イギリスの子どもの本は？」（9月25日（土））

第2回は、国際ペン東京大会2010のセミナー「子ども・環境・文学—そして未来へ」のパネリストとして来日したジャクリーン・ウィルソン氏を講師として迎えた。

現在イギリスで最も人気がある児童文学作家で、作品が34か国語に翻訳されているウィルソン氏は、人気作家となった自身の歩みを振り返りながら、児童文学の魅力やイギリスにおける児童書の移り変わり、自身が取り組んでいる学校訪問の活動などにつ



ウィルソン氏



さくま氏

いて語った。聞き手のさくまゆみこ氏は、ウィルソン氏の作品の特徴や大学の創作クラスでのウィルソン氏の授業の様子、イギリスの家庭の状況などについてインタビューした。

このシリーズでは、日本ペンクラブ「子どもの本」委員会の全面的な協力を得て、国内外から現在活躍中の人気作家を講師に迎えることができた。参加者アンケートでは、「海外における児童書の現状を知ることができてよかった」という回答が多かった。

シリーズは2011年以降も継続する予定である。なお、講演要旨は国際子ども図書館ホームページで順次公開している。

（企画協力課協力係）

日本の児童文学者たち

宮川 健郎

2010年度の児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って—は、11月8日(月)、9日(火)に行われた。

毎年秋に開催される児童文学連続講座の終了時には、受講生に対するアンケート調査を行い、今後、この講座でとりあげてほしいテーマについても要望を募っている。今回は、ここ何年かのアンケート調査で名前のあがってきた日本の児童文学者たち5人について考える二日間になった。

5人とは、宮沢賢治、新美南吉、金子みすゞ、石井桃子、赤羽末吉。いずれも、日本の児童文学に新しい領域を開いた作家や詩人、画家であり、その作品は、現在も子どもたちに読みつかれている。講座は、5人を語ってくださるのにふさわしい講師を得て、それぞれの仕事の特徴を学ぶとともに、それをとおして、日本児童文学の歴史と現在を見通す場になっていった。講義の内容は、下記のとおりである。

<講義内容>

- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| ・賢治童話と子ども読者 | 宮川 健郎 (武蔵野大学文学部教授) |
| ・南吉童話の闇と光 | 遠山 光嗣 (新美南吉記念館学芸員) |
| ・金子みすゞ—読みものとしての童謡— | 藤本 恵 (都留文科大学文学部初等教育学科准教授) |
| ・石井桃子 | 小寺 啓章 (ノートルダム清心女子大学非常勤講師) |
| ・<ヴィジュアル・ストーリーテラー
赤羽末吉>の世界 | 吉田 新一 (立教大学名誉教授) |
| ・日本の児童文学者たち—参考図書紹介 | 大幸 直子 (国際子ども図書館資料情報課長) |



一日目の最初の講義は、私の宮沢賢治。賢治童話は、作者の生涯や思想とかわかって論じられることが多いけれど、子ども読者は、それをどう読むのか。私自身がかつて試みた、子どもたちへのインタビューのようすや調査結果を紹介しながら話してみた。児童サービスと関係の深い、賢治童話の絵本化や紙芝居居の可能性や問題点についても、いろいろな本を見ながら考えていった。

「他者と自分は全く違う意識の世界にいて、人間は本質的に孤独であること。自分は自分で思うほど正しくない弱い存在であること。」—遠山光嗣さんは、新美南吉の童話には、人間についてのこの二つの真実を知るという経験が描かれているという。遠山さんは、南吉の生涯と作品を紹介しながら、南吉童話の本質に迫っていった。

新美南吉もそうだが、金子みすゞの作品は、国語教科書をとおして子どもたちに手渡されてきた。二日目の藤本恵さんの講義は、金子みすゞという童謡詩人を語ることとあわせて、教科書におけるみすゞ童謡の教材化や、それによる授業のあり方にもおよんだ。私たちは、学校教育のなかでの児童文学作品のあつかいに関する想像力をもつことができたと思う。

小寺啓章さんの石井桃子をめぐる講義は、公立図書館の館長を長く務め、生前の石井とも親交のあった小寺さんならではのものだった。創作、翻訳、編集、批評など、石井桃子の多方面にわたる活動をたどりながら、石井が求めた子どもの文学と児童図書館とは何だったのかを考える時間になった。

吉田新一さんも、御自身の赤羽末吉とのかかわりから話しはじめ、赤羽の多くの作品を映像で見せながら解説して下さった。私たちは、赤羽末吉という絵本作家の表現の独自性をよく具体的につかまえることができたのである。

そのほか、一日目午後の大幸直子資料情報課長による「参考図書紹介」は、今回取り上げた5人に関する本を中心に。そして、参加者全員がグループに分かれての「意見交換会」は、図書館における児童書の選書をテーマに行った。

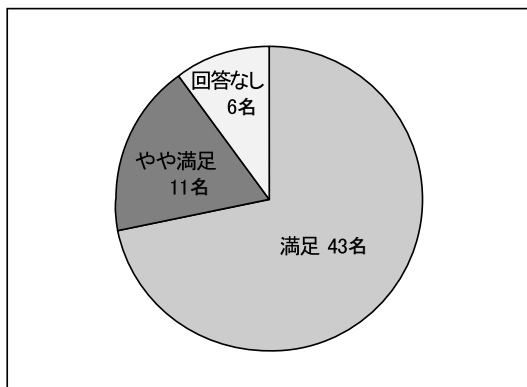
今回の講座は、よく知られた児童文学者たちを取り上げたから、わかりやすい内容だったが、各講義には、それぞれを新しく見直す視点が確かにあって、ずいぶん興味深いものでもあったのである。

(みやかわ たけお 武蔵野大学文学部教授、国立国会図書館客員調査員)

受講者アンケート結果から

(受講者数：60名、回答数：60件、回答率：100パーセント)

○2010年度児童文学連続講座の満足度



○主な意見

内容がまとまっていて分かりやすかった。／それぞれの作者により近付けたように思う。／普段は研究者の方のお話を聞ける機会がないので、新しい発見がたくさんあった。／今まで気付かなかった作品のメッセージや、知らなかった作者の姿を知ることができて、作品の理解を深めることができた。／おおむね満足だったが、やや期待と違う講義もあった。／盛りだくさんだったが充実していた。／もっと時間をかけてお聞きしたい内容ばかりだったが、仕事との兼ね合いを考えると精一杯の日程。／どの講義も大変良かったが、では図書館員として子どもに手渡す立場としてどう読むかということまで考えたい、となると時間が足りない。等。

(企画協力課協力係)

電子展示会「絵本ギャラリー」

『『コドモノクニ』掲載作品検索』への画像追加

国際子ども図書館は、2010年5月5日(水)、「絵本ギャラリー」の『『コドモノクニ』掲載作品検索』に、新たに約3,200点の画像を追加した。

『『コドモノクニ』掲載作品検索』は、財団法人大阪国際児童文学館などの協力により、絵雑誌『コドモノクニ』をデジタル画像で提供するデータベースである。

新しい画像は、武井武雄、清水良雄、安泰、川上四郎、深沢省三、初山滋、安井小弥太などの作品で、収録画像の総数は約4,800点となった。今後も順次データを追加していく予定である。

また、画像を拡大する機能を追加し、利便性を向上させた。



清水良雄画
第8巻第8号表紙
昭和4（1929）年6月



水谷まさる
「あんのよのおけいこ」第7巻第7号
昭和3（1928）年6月

御覧いただくには・・・

「絵本ギャラリー」トップ画面 (<http://www.kodomo.go.jp/gallery/>)
右上の、『『コドモノクニ』掲載作品検索』を選択してください。

(企画協力課企画広報係)

本の文化を築く

～インド・ニューデリーで開催の児童図書館国際会議

石川 真理子

2010年2月4日(木)から2月6日(土)まで、インドのニューデリーで「児童図書館国際会議～本の文化を築く」(International Conference on Children's Libraries - Building a Book Culture)が開催された。主催は、国際児童図書評議会のインド支部にあたる、インド児童文学作家イラストレーター協会 (Association of Writers and Illustrators for Children: AWIC) である。筆者はこの会議に参加したので、概要を紹介する。

開会に当たり、A.P.J.アブドゥル・カラム前インド大統領が、子どもにとって読書が必要不可欠なものであることなどを述べた。一般の英字紙にも取り上げられるなど、インドではこの会議をとっても重要なものととらえていたようである。

会議にはインド国内外から図書館員、NGO 関係者、イラストレーター、作家、教育関係者、出版関係者などが集まり、「児童図書館の発展」、「児童図書館にふさわしい読書材料」、「児童図書館サービス」、「社会を変えるきっかけとしての児童図書館」、「境界のない児童図書館」の五つのセッションの中で、子どもと本をつなぐ活動やその重要性について報告した。

インド国内からは学校司書の参加者も多く、各セッションの終わりには、第一線で子どもと本をつなぐ活動をしている参加者と発表者との間で、活発な質疑、意見交換が行われた。

特にインド国内の発表者に対する会場の反応は大きく、「児童図書館の発展」のセッションで、学校図書館について、学校司書が図書館活動を考えることの重要性や、司書とクラスの先生がチームティーチングを行うことが大切であるということが述べられると、会場からは不読の生徒にどのように接したらよいかなど、多くの質問が出された。

「児童図書館にふさわしい読書材料」のセッションでは、出版社、イラストレーター、著者、翻訳者から、それぞれの役割について発表があったが、出版

社の役割に質問が集中していた。インドの出版社の発表に対し、会場の参加者からは、多言語国家インドでは、言語によっては子どもの本がないという声が上がっていた。

日本からは、村山隆雄前国際子ども図書館長から、日本の文庫活動の多様性や国際子ども図書館の役割についての報告があった。さらに「境界のない児童図書館」のセッションでは、ミュンヘン国際児童図書館のバーバラ・シャリオット前館長の「読書と図書館サービス促進のための電子図書館」と題するペーパーが代読され、この中で、米国が国際的な協力を得ながら進めている「子どもの本の国際電子図書館（ICDL）」や日本の国際子ども図書館が進める児童書の電子化が、先進的な事例として紹介されていた。

各日の午後にはオープンフォーラムが設けられ、読書へのモチベーションを高めることを目的とした、子どもたちによる、物語を題材とした劇などの公演が行われた。また、IBBY 朝日国際児童図書普及賞受賞団体を始めとする、子どもと本をつなぐ各国の大人たちが、インドの子どもたちを前に朗読などの活動を実演した。オープンフォーラムでは、日本人でこの会議に参加した4人が日本語、ヒンディー語、英語で「ねずみの嫁入り」の読み聞かせを行い、筆者も参加したのだが、このお話がこれから面白くなるというところで会場の参加者が反応していたことは、印象的であった。



AWIC が行っている子どもと本をつなぐ活動の一つ“Guess the Story”。台詞を語らない劇から観客はおはなしを想像して楽しむ。

この会議は、各国や地域で実践されている子どもと本をつなぐ活動を知ることができるとともに、実際に活動する際のヒントを与えてくれる、貴重な場となった。

(いしかわ まりこ 児童サービス課副主査)

世界の仲間に聞いてみよう！～スウェーデン出張報告

小林 直子

会議の発表原稿の大部分が事前に会議サイトに掲載される世の中で、はるばる世界中から図書館員が集まる大会を開く意味はあるのか？と疑問を持たれる方もあるかもしれない。筆者は2010年8月、スウェーデン第二の都市ヨーテボリで開催された第76回国際図書館連盟（IFLA）大会に参加し、「意味はある」と確信する場面いくつか出会ったので、そのことを中心に報告したい。

ちなみに、第76回 IFLA 大会には、120以上の国・地域から3,300人以上の図書館関係者が集まった。

<児童図書館と学校図書館は、世界の子どものために一緒にやっぴいこう！>

8月13日(金)に標記のタイトルで、児童・ヤングアダルト図書館分科会（以下、児童 YA 分科会）、学校図書館・リソースセンター分科会合同のオープンセッションが開催され、約250人の参加があった。学校図書館と公共図書館の協力がテーマで4か国から5本の発表があり、2館が完全に一つの組織として運営されている学校内公共図書館（Joint Library）から地域単位の協力事業、全国的な協力イベントまで、協力の度合いの異なるバラエティに富んだ事例が披露された。どの子どもにも図書館が二つ必要（公共図書館と学校図書館）、二つの館種が協力することは予算的にも得である、などの主張が印象に残った。

セッション後半の質問タイムは、さながら世界の児童サービス担当者の悩み相談室であった。（ベルギー）多忙な教員を公共図書館との協力事業に巻き込むにはどうしたらいいか？（ガーナ）景品つきのイベントで子どもを引き付けたいが予算がない場合どうしたらいいか？（ロシア）親に図書館の意義を伝え、子連れで来館してもらいたいけどどうしたらいいか？三つ目の質問に対しては、次々に回答が寄せられた。「親の付添いが必要なイベント（たとえば夜のおはなし会）を実施する」、「幼稚園の保護者会に出て図書館について紹介する」、「乳児家庭への市からのプレゼントに図書館の PR 資料を含めてもらう」、「図書館に誘うのは早ければ早いほどいいので、産院で図書館からのプレゼン

トを配る!」。アメリカの参加者からの「産院で」の回答には会場が沸き、楽しい雰囲気の中でセッションがお開きとなった。

<児童図書館：多文化へのオープンアクセス?>

8月15日(日)に標記のタイトルで、児童 YA 分科会、多文化サービス分科会合同のオープンセッションが開催され、早朝にも関わらず100人を超える参加者が集まった。スペイン、南アフリカ、中国、ポーランドから、移民が多い地域の図書館での多文化サービスの実践事例が発表され、また、子ども YA 分科会から同分科会主催プロジェクト「姉妹図書館」についての紹介もあった。このプロジェクトは、言語が同じで国が異なる二つの図書館が姉妹として組み、双方の子どもたちが相手国についての絵本を読んで感想を交換する、自分の国や地域を紹介する絵本を作って贈りあう、など本にまつわる活動をして交流するものだが、言語の問題から日本の参加は難しいと思っていた。

ところが、このセッションの直後に、フィンランドの図書館員から「地元に関心を持って多くの人と日本語で交流できるので、ぜひ日本の図書館と姉妹になりたい」との申し出を受けた。その場に居合わせなければ、姉妹探しが始まることはなかった…これは、確かに対面会合の成果ではないだろうか？

その他、児童 YA 分科会常任委員会、同分科会主催のオフサイトセッションなどにも参加した。前者については、『国立国会図書館月報』597号(2010年12月)を御参照いただきたい。写真は、後者で訪れた郊外のメルニケ公共図書館の児童室の一コマである。



なお、オープンセッションの発表原稿は、IFLANET に掲載されている。

(URL <http://www.ifla.org/en/conferences-sessions/216>)

(こばやし なおこ 児童サービス課長)

第32回 IBBY 世界大会に参加して

青山 真紀

2010年9月8日(水)から9月12日(日)まで、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラで開かれた第32回国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People: IBBY) 世界大会へ参加した。以下に出張の概要を記す。

IBBY 世界大会とは

IBBY は、1953年にスイスのチューリッヒで設立され、子どもと子どもの本に関わる全ての人をつなぐ世界的ネットワークとして活動を行っており、世界大会は2年に一度開催される。今大会は、70か国以上から500名を超える、児童書の創作や普及・研究、子どもの読書推進に携わる関係者（作家、画家、研究者、図書館員、編集者、出版関係者等）が集まった。

マイノリティの力、そして児童書の力

今大会のテーマは「The Strength of Minorities (マイノリティの力)」。言語、貧困、障害等、さまざまな状況におけるマイノリティと、子ども、児童書、児童文学等の関わりについて講演やセミナーセッションなどが行われた。移民の多い国でそれぞれの文化背景を知るために児童書やブックリストを活用しているという事例報告や、「イラストレーションはユニバーサルランゲージ

である」という話など、子どもの本が異文化をつなぐ窓として機能していることが分かり、興味深く聞いた。

マイナー言語での出版活動についての報告では、関係者の努力により、読者はもちろん書き手や出版部数も増え発展してきていると発表者が嬉しそうに語る姿が印象的であった。例えば、オランダの



基調講演の様子

フリジア語圏の発表者からは、IBBY 大会での出会いをきっかけに作品が日本語にも翻訳されたと紹介され、この大会が国境を越えた児童書の広がりにとって貴重な場であると実感した。障害者や貧困層を支援する活動についても、多くの講演があった。ストリートチルドレン支援活動の報告にあった「本や美しい絵を手にしたときに子どもたちの目は輝く」という言葉には、児童書には大きな力や可能性があることを強く印象付けられた。

国際アンデルセン賞、IBBY オナーリスト賞、IBBY 朝日国際児童図書普及賞

各賞の授与式も大会中に行われた。国際アンデルセン賞作家賞は英国のデイヴィッド・アーモンド、画家賞はドイツのユッタ・バウアーに贈られた。IBBY オナーリストは、各国支部が外国に紹介したい作品として選んだ本のリストであり、日本からは『フュージョン』（濱野京子著）、『うしお』（伊藤秀男作）、『ダイドーと父ちゃん』（ジョーン・エイキン作 こだまともこ訳）が受賞した。

児童・青少年の読書推進のために継続して活動する団体・専門機関に贈られる IBBY 朝日国際児童図書普及賞は、ガーナの「オス子供図書館基金」と、コロンビアの「読書計画協力会議」が受賞した。会場内には関連展示もあり、皆手に取って熱心に見ていた。



オナーリスト受賞作品の展示

これからの活動に向けて

大会全体を通して、固有の文化を伝えていきたいという熱意、そして、困難な状況にある子どもたちにも本の楽しみを届けたいという思いが強く感じられた。マイノリティの出版物は、部数や情報が少なく手に入れることが難しいため、図書館で購入や情報提供をしてほしいという要望もあった。今回の貴重な経験を、インターネットでの情報発信、展示会の企画、資料収集など、今後の具体的活動に活かしていきたいと思う。

(あおやま まき 企画協力課企画広報係長)

韓国国立子ども青少年図書館との交流事業

国際子ども図書館と韓国国立子ども青少年図書館は、2009年度と2010年度に業務交流と小展示交流を行った（2009年度については、『国際子ども図書館の窓』第10号参照）。業務交流は、2010年度は韓国から職員を招へいして行った。

1. 業務交流

国立国会図書館と韓国国立中央図書館の業務交流期間中の10月14日（木）、韓国国立中央図書館代表団の一員である韓国国立子ども青少年図書館情報サービス課司書主事のチョ・ジェハク（趙宰鶴）氏が、国際子ども図書館を訪問し、業務交流を行った。



報告するチョ・ジェハク氏

午前中は「業務交流Ⅰ」として、チョ氏と当館の五十嵐麻理世企画協力課副主査が、韓国国立子ども青少年図書館と国際子ども図書館のこの一年の主な活動の進ちょく報告及び特にホームページによる児童向けサービスに焦点を当てた実践報告を行った。その後、児童向けサービスの企画を生み出す方法や、児童サービス担当者の専門性強化に役立つ研修内容などについて質疑、意見交換を行った。

午後は「業務交流Ⅱ」として、おはなし会などの来館サービスや、学校図書館セット貸出し事業などについてチョ氏と当館の児童サービス担当者が懇談した後、職員の案内でチョ氏が展示会「絵本の黄金時代 1920～1930年代一子どもたちに託された伝言」を鑑賞した。

チョ氏は翌10月15日（金）に東京子ども図書館と新宿区立こども図書館を視察した。
(企画協力課協力係)

2. 小展示交流

韓国のおはなし会で人気のある絵本

—韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本

小展示交流は、日韓両国の交流を深め、子どもたちの国際理解を促進するために、韓国国立子ども青少年図書館と国際子ども図書館が同じテーマで選んだ児童書を展示するもので、今年度は10月21日(木)から12月26日(日)まで、標記テーマで「世界を知るへや」展示コーナーで開催した。

国際子ども図書館では、韓国子ども青少年図書館が選んだ絵本30冊とその日本語版など計57冊を展示した。昨年の展示が韓国原作の絵本に限定したのに対し、今年の展示は翻訳本も含めた人気のある作品であったため、『おつきまこんばんは』や『あさえとちいさいもうと』などの日本が原作のものも多く含まれていた。



韓国国立子ども青少年図書館の
展示風景



「世界を知るへや」での展示

また、韓国国立子ども青少年図書館の活動についてパンフレットやパネルで紹介した。関係機関へ広報し、韓国語を母国語とする来館者も積極的に呼び込んだ。

韓国側の展示は、10月12日(火)から12月27日(月)まで行われ、国際子ども図書館が選んだ本だけでなく、韓国国立子ども青少年図書館が選んだ本もあわせて110冊が展示された。

(児童サービス課)

桃太郎とロシア革命

～スウェーデン語版ちりめん本『桃太郎』をめぐって

酒井 貴美子

国際子ども図書館は開館10年という若い図書館である。古書の入手は古書店にお願いする他ない。

あるとき、「スウェーデン語版のちりめん本『桃太郎』(注)があります」という連絡があった。同書の訳者はコンニィ・シリヤクス…この著者名では児童向けの著作はない。『ロシア革命運動』、『ロシアにおける革命と反革命とフィンランド』などが並ぶ。同姓同名の別人か？それにしても、この名前はどこかで見たことがあると思ったら、司馬遼太郎『坂の上の雲』に登場するフィンランドの独立運動家の名前だった。

調べてみると、シリヤクスは2度目の結婚後、5年ほど日本に住んでいたことが分かった。二人の息子はいずれも日本で生まれている。富裕なドイツ系アメリカ人家庭出身の夫人がシリヤクスに反露・独立運動ではなく、実家の事業に加わることを望んだ結果である。反露ビラを書いていたシリヤクスの筆は、この時期、日本民話の翻訳と日本関係の本の執筆に向けられる。その後、シリヤクス夫妻は子どもの教育のためにフィンランドに戻り、ここからが『坂の上の雲』の世界となる。

蔵書充実のため、私たちも日々勉強しているが、古書店さんにはかなわない。児童文学史上著名な作品はともかく、坂東捕虜収容所出版のグリム童話、アラブ世界の児童書の草分けとなった「アラブの若者社」の本など、いずれも古書店さんに教えていただき、驚きながら、当館の蔵書に加えることができた。今後も、もっともっと驚かせてもらい、より充実した蔵書構築をしていければと思う。

(さかい きみこ 資料情報課主査)

(注) Momotaro / pa svenska af Konni Zilliacus. Tokyo: T.Hasegawa's Tryckeri,

[18--] (請求記号 Y18-B527)

トルコの児童書

片桐 早織

注 邦訳のないものは仮題を付け()内に原書名を記した。

はじめに

「トルコの児童書」と聞いて、何が思い浮かぶだろう？あまりなじみがないのではないだろうか。では「トルコのおはなし」では？すぐにホジャの名前が浮かぶのでは？実はこの『ナスレッディン・ホジャのおはなし』に代表される「おはなし」が、トルコの児童書の大きな部分を占めている。

トルコの「おはなし」マサル

トルコ語で「おはなし」のことをマサルという。辞書では「お話、民話、おとぎ話、作り話、うそ」と定義されている。トルコは民話の宝庫である。東から現在のトルコへと移住した歴史的経緯、かつての広い支配領域、そしてアナトリアの土地自体の歴史の古さもあって、数多くの民話が蓄えられたのだと思われる。それらの民話は、ボラタブ (P. Naili Boratav) などの研究者によって採話され『〇〇マサル集』などの形で出版され、子ども向けに再話され絵本化された。

マサルはテケレルメと呼ばれる独特の語り口で始まる事が多い。「ビル ヴァルムシュ ビル ヨクムシュ」(あったそうな なかったそうな)などで始まるこれらテケレルメは、ころころと転がるような響きで耳に心地よく、「語り」の楽しさをよく表している。それらのマサルの中でも最も名高い登場人物が、先に挙げた「ナスレッディン・ホジャ」と「ケローラン」である。

ナスレッディン・ホジャは、トルコでは実在を信じられているほどの人物で、大きなターバンをかぶり、ロバに乗る姿が定番である。吉四六さんにも似たそのとんちと笑い話は、名前を変えて中東に広く伝わっている。

ケローランは「髪の毛のない男の子」の意味である。民俗学的には「身体的な欠陥がある者は不思議な力を持つ」とのことだ。ケローランにはとても知恵がある。いたずらっ子で怠け者だが、その知恵で強者を打ち負かし懲らしめる。

主人公として様々な試練を乗り越え、皇帝の娘と結婚するといった話から、脇役として主人公に救いの手を差しのべるといったものまで、「ケローランもの」は数多い。ホジャもケローランもトルコでは大変人気があり、豪華本から小冊子まで様々な形で児童書が出版されている。

トルコの児童書の作家・画家

では創作の世界ではどのようなものがあるだろうか？第一にオメル・セイフエッティン (Ömer Seyfettin) が挙げられる。彼はオスマン帝国末期の作家で、日常生活や歴史的事件、民間伝承などを主題にした作品を、民衆の話し言葉で著した。その作品は風刺に富み、トルコにおける「短編小説」のジャンルの創始者と言われるが、トルコ人にとっては何より「子どもの本の作家」である。特に『馬櫛 (*kaşığı*)』は、トルコで知らない子どもはいないという。

現代の作家としてはムザッフェル・イズギユ (*Muzaffer İzgü*) を挙げたい。1933年生まれ、風刺小説作家でもある彼が児童書の執筆を始めたのは1970年代からだが、現在も盛んに活動を続ける多作にして大ベストセラー作家である。奇抜でユーモアに富む一方で、働き続けた自らの少年時代を反映した作品など、社会の現実を重視した作品も多い。2002年、2010年の国際アンデルセン賞作家賞候補者であり、またイスタンブール国際児童書展優秀賞、ブルガリア金のヤマアラシ賞ほか、数多くの賞を受賞している。

またトルコの子どもたちに人気の高い作家と言えば、『こわれたかさ (*Kırık Şemsiye*)』のセビム・アク (*Sevim Ak*)、小説の他紀行文も多いギュルテン・ダユオール (*Gülten Daynoğlu*)、『高血圧のプラタナス』(蝸牛社) のベヒチ・アク、『魔法の本 (*Sihirli Kitap*)』など魔法シリーズのファティフ・エルドアン (*Fatih Erdoğan*)、『王の正義 (*Kralın Adaleti*)』など歴史小説の多いビルギン・アダル (*Bilgin Adalı*)、『ローラースケートの女の子 (*Patenli Kız*)』など、どちらかといえばヤングアダルトに近いゼイネプ・ジェマリ (*Zeynep Cemali*)、著書はまだ少ないが、『小さな魔女シェロクス (*Küçük Cadı Şeroks*)』などで人気のアスル・デル (*Aslı Der*)、『鏡のなかの女の子 (*Aynadaki Kız*)』や『コウノトリと雪だるま (*Leylek İle Kardan Adam*)』など数多くの楽しい

お話を著しているヌール・イチョズ (Nur İçözü)、そして『夜を忘れたゾウ (Geceyi Unutan Fil)』や『ぼくはいつ大きくなるの? (Ben Ne Zaman Büyüyeceğim?)』など、子どもからヤングアダルト、更に大人向けの多作作家アイトユル・アカル (Aytül Akal) が挙げられる。

絵本作家としては、しっぽを生やそうと奮闘する鳥のお話『しっぽなし (Kuyruksuz)』のジャン・ギョクニル (Can Göknil)、現代から古代まで五つの時代の子どもたちをたどる『五人の子ども、五つのイスタンブル (5 Çocuk 5 İstanbul)』や『もぐらのクキ (Köstebek Kuki)』のベトユル・サユン (Betül Sayın)、『ヴェリのクッキー (Veli'nin Kurabiyesi)』のアイラ・チュナロール (Ayla Çınaroğlu) —彼女は幼児向けの絵本も多く手掛け、その画風はどこか折り紙に似ている—が挙げられる。上述の3人は国際アンデルセン賞候補者でもある。また『森のこえ』(蝸牛社)のフェリドゥン・オラルはポーロニヤ国際絵本原画展の入賞者であり、特にヤブクレディ出版社(通称 YKY)での出版が多く、同社出版の豪華本のマサル集のイラストも描いている。

画家としてはムスタファ・デリオール (Mustafa Delioğlu) が挙げられる。近年、彼の手による表紙や挿絵が最も多いという印象を受ける。彼もまた国際アンデルセン賞画家賞候補者である。

トルコの書店・ブックフェア

これらの児童書をどこで入手するかと言えば、イスタンブルのイスティクラル通りに行くのが一番だ。インサン書店、イスティクラル書店、上記の YKY など大きな書店が集中している。児童書は B6 ほどの大きさと80頁ほどのペーパーバックが主流と言えるだろうか。価格は6リラほど。絵本はソフトカバーで B5 から A4 サイズ、30頁くらいのもが多い。価格は14リラほど。2010年現在1リラ60円ぐらいであるが、トルコは日本よりかなり物価が安い上に格差社会であることを考えると、安いとは言えないだろう。

また毎年イスタンブル、ブルサ、イズミルなどでブックフェアが開催される。講演会、朗読会、作者のサイン会などのイベントが催され盛況な様子だ。特にイズミルのブックフェアは、期間中に4月23日の「国民権の日および子供の

日」を含むので、児童書関連のイベントが多い。だがトルコは地域による格差も大きい。もちろんインターネットによる購入もできるが、地方によっては書籍が手に入りにくいところもある。地方の子どもたちが、自由に本を手にとれるようにするにはどうするか。実はバスを使った巡回本屋があるのである。



バスの本屋「パフィン」



車内にて

巡回バス本屋パフィン社は「すべての子どもに読書を」をモットーに4,000冊の本をバスに積み、毎年地方の小学校などを回っている。本を選定するに当たっては、「子どもを対象にした様々なイベントを頻繁に行い、子どもの反応から、小説、おとぎ話、科学、なぞなぞ、ジョーク、詩など、さまざまな分野で質の高いものを選び、それぞれの子どもが自分にふさわしい本を選べるよう留意する」とのことだ。

翻訳大国トルコ

さて上記のパフィン社によれば、トルコの子どもたちの間で人気のある本、作家は以下のとおりである。特に日本でも翻訳されているものを示す。

「ハリー・ポッター」シリーズ (J.K.ローリング著 静山社)、「ナルニア国物語」シリーズ (C.S.ルイス著 岩波書店)、「プチ・ニコラ」シリーズ (ルネ・ゴシニ著 偕成社)、「スーパーヒーロー・パンツマン」シリーズ (デイブ・ピルキー著 徳間書店)、「タイガーチーム事件簿」シリーズ (トーマス・プレツィナ著 さ・え・ら書房)、「パーシー・ジャクソン」シリーズ (リック・リオー

ダン著 ほるぷ出版)、『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ著)、『ちいさな黒いさかな』(サマド・ベヘランギー著 ほるぷ出版)、ロアルド・ダール、フランチェスカ・サイモン、ネストリンガー、クレシッダ・コーウェル、ジム・ベントン、ミヒヤエル・エンデ、**J.R.R.**トールキン。

「人気のある本」は翻訳本が多い。実のところパフィン社がバスに積むため選定する本の6割を翻訳本が占めるとのことだ。トルコは翻訳が盛んである。アンデルセン、グリムはもちろん、ドストエフスキー、ディケンズ、オスカー・ワイルド、マーク・トウェインなどの世界名作もの、**A.A.**ミルン、ルイス＝キャロル、エリック・カール、デビッド・マッキー、アーノルド・ローベル、『どろぼうの神さま』のコレネーリア・フンケ、『ほくがげんきにしてあげる』のヤーノシュ、『ねむれないの？ちいこまくん』のマーティン・ワッデル、『心の小鳥』のミハル・スヌニットなどなど、主に欧米の作者の作品が、子どもの本の大手であるジャンチョジュク（ジャン出版社の児童書部門）やマヴィブルト社などによって翻訳出版されている。出版の量、早さがすばらしいものもある。例えばトーマス・ブレッツィナは特に人気が高く、『タイガーチーム事件簿』シリーズの翻訳版だけでも既に70冊を超え、原作に迫る勢いだ。これはトルコの欧米、特にヨーロッパへの距離的心理的な近さを示しているのかもしれない。特にドイツ語圏の作品の翻訳は早いようだ。ドイツへの移民の多さとも関係があるのだろう。

おわりに

マヴィブルト社の創設が1980年、ジャンチョジュクの設立が1981年であることを考えると、トルコの児童書の歴史はまだ浅いと言えるかもしれない。だがマヴィブルト社は「すべての子どもに良い本を」をスローガンに、子ども雑誌『赤いねずみ (*Kirmizifare*)』を刊行し、ジャンチョジュクはストーリーテリングや人気作家による学校訪問を主催するなど、盛んに活動を行っている。トルコの児童書は今後ますます期待できそうである。

私の質問に対し、快く回答と写真の転載許可をくださったパフィン社にお礼申し上げます。
(かたぎり さおり 翻訳家)

ベトナムの児童書事情

加藤 栄

1. ベトナムにおける児童書の出版状況

筆者は国際子ども図書館において、2009年度ベトナム児童図書関連の選書リストを作成する機会を得た。以下に、リスト作成の過程で得たベトナムの児童書事情を紹介する。

ベトナムは30歳未満が全人口(8,579万人)の過半数を占める若い国である。2006年の人口統計によれば、0歳から4歳までの人口は減少傾向にあるものの、14歳以下の人口は全体の3割近くにも上り、児童書に対する潜在的需要は極めて大きいと言える。実際、ハノイやホーチミン市にある2階建て以上の大きな書店に行くと、文房具や雑貨を含む児童書売り場が成人向け書籍とは独立した別のフロアに設けられていて、子ども向け商品の市場の大きさを実感させられる。

では、ベトナムの児童書は1年間にどれくらい出版されているのだろうか。2007年のデータによると、年間出版タイトル数は26,609件、出版部数は2億7,640万部。このうちベトナム語書籍は19,691タイトル/2億4,880万部、外国語書籍は6,918タイトル/2,760万部で、児童書はタイトル数にしてベトナム語書籍の16%、出版部数は6%を占めている。しかも2000年から2004年までは、成人向け書籍の各ジャンル(社会科学書、理工学書、文芸書)と比べて、タイトル数では大差がないものの、出版部数は常に1,000万部と抜きん出て多く(他ジャンルでは、最も多くて、2004年の理工学書の376万2,000部)、2005年以降も出版部数に関しては児童書が首位の座を守っている。

2. キムドン出版社

ベトナムの児童書市場で大きなシェアを占めているのがキムドン出版社(1957年創立)である。ベトナム全土に57ある国営出版社の中で、同社は唯一の児童書専門の出版社で、1990年代半ばまでの児童文学コンテストの受賞作は、ほぼ100%が同社から出版された作品である。

ベトナム戦争中から戦後にかけて、ベトナムの本は国家補助金によって出版されていたが、1986年のドイモイ政策以降、国家補助金は打ち切られ、出版社は独立採算制に移行した。それに伴い、他の出版社同様、キムドン社も存亡の危機に直面し、1980年代末から1990年代初頭にかけて、年間に出版できるタイトル数は20件未満にまで激減した。そうした危機を救ったのが「ドラえもん」の海賊版の大ヒットである。「ドラえもん」はベトナムの出版史上、未曾有の売上を記録し、これによりキムドン社は奇跡の復活を果たしたと言われる。

1990年代後半以降、書籍の多様化と年齢別分化が進み、特に絵本や昔話の分野に他の国営出版社や2005年に設立が認められた私営出版社が参入してくるようになったものの、2006年のキムドン社の年間出版量は1,465タイトル/1,640万部まで増加し、児童書部門では相変わらず優位な地位を占めている。ちなみに、同社社長ファム・クアン・ヴィン氏からの情報提供によれば、同社の出版物の6割は絵本とコミック（絵本3割、コミック3割）だということだが、特に日本のコミックの著作権は同社がほぼ独占している状態であり、先にあげたベトナム語書籍中の児童書の部数が、キムドン一社の出版量より少ないのは、海外童話やコミックの翻訳がここには含まれていないためだと考えられる。

3. ベトナム作家協会賞、キムドン出版社賞など

児童文学の作品に与えられる主な国内賞に、ベトナム作家協会賞とキムドン出版社賞がある。まず前者であるが、同協会内には児童文学部会が置かれていて、基本的に年1回、児童向けの小説や詩など、すぐれた創作に対して与えられる。後者は1957年の同社創立時に設けられた賞で、年に一度か数年に一度授賞される。この二つの賞では、売上の良し悪しに関わらず、子どもの成長段階に適した良質の作品であるかどうかを選考の基準になっている。上記の他、作家協会や新聞社によるテーマ別のコンテストや、海外の作家協会との共催で実施されたコンテストの優秀作に与えられる賞もある。

またベトナムには、成人向けの作品も含め、文学・芸術活動の発展に貢献した作家に与えられる賞—「ホーチミン賞」と「国家賞」があり、トー・ホアイやグエン・ファイ・トゥオンのように、児童文学コンテストでは受賞していない

が、この賞は獲得したという作家もいる。特にトー・ホアイの代表作『コオロギ漂流記』は、「コオロギ相撲」でベトナムの子どもたちになじみの深い虫たちを登場人物として世界平和を訴えた作品だが、1954年の出版当時から現在に至るまで、息長く読み継がれるロングセラーとなっている。

4. ベトナムの児童文学に描かれた子ども像

ベトナムには「一に妖怪、二に幽霊、三に小中高校生」という言い方がある。これはベトナム人が怖いと思うものを順に並べた言い回しで、日本の「地震、雷、火事、親父」に当たる。3番目に小中高校生が入っているのは、子どもというものは無垢で純真な反面、社会的ルールに反する行動をとることもある厄介な存在でもあるからだ。このような両義性をもつ存在としての子ども像がベトナムの児童文学に描かれるようになったのは、さほど遠い昔の話ではない。

ベトナム戦争中から戦後にかけて、児童文学は成人文学と同様、民族独立と社会主義国家建設に奉仕するものと位置付けられた。社会の主役は勤労大衆であり、作家たちは農村や解放区に入って現実を学び、それを作品化することが求められた。この時期に書かれた作品の主なテーマは戦争で、そこに描かれたのは、本来の年齢よりも成熟し、大人の手となり足となってけなげに奮闘する子ども像である。時には死をも怖れず戦う勇敢な子どもたちは、国家が求める理想の子ども像だった。

このような傾向に変化が現われるのは1980年代半ば以降のことである。曲がったことが嫌いで、大人たちの不正に敢然と立ち向かう反抗する子ども像を鮮やかに描き出したズオン・トゥー・フオンの『幼い日の旅立ち』を皮切りに、1980年代末から1990年代前半にかけては、子どもを取り巻く日常一家庭や学校での生活に材を取り、大人の間尺に合わない、ネガティブな側面も持った等身大の子ども像が登場するようになる。グエン・ティ・ミン・ゴックの『スー坊やとの五日間』、グエン・ニャット・アインの『妹クエンと私』では、親の愛情を弟妹に独占されてフラストレーションをためている、上の子のやり場のない思いが生き生きと描かれている。

この時期には、ベトナム戦争後に生まれたベビーブーマーの成長とともに、

思春期特有の問題も児童文学に取り上げられるようになった。チャン・ティエン・フオンの短編「君は今どこに」やグエン・ニャット・アインの『つぶらな瞳』は、多感な年頃の少年、少女の純愛をテーマにしている。後者は、主人公の少年が幼なじみの少女を一途に思い続ける話だが、未成年の妊娠という児童文学にはショッキングなディテールも書き込まれている。

1990年代半ば以降、アメリカとの国交正常化で経済発展に弾みが付くようになると、ジャンルの多様化が進み、国家補助金時代には手薄だった絵本、科学的知識や外国語を学ぶ知育本や図鑑なども出版されるようになった。印刷技術の面でも革新が進み、カラー印刷やハードカバーの本も出版されるようになった。また近代以降の「名作」が仕分けられて「ゴールデン文庫」の名称でシリーズ化され、カラフルな装丁のポケットブックとして復刻されている。

1995年には、キムドン社創立45周年に向け、「ドラえもん」に代わる新しいヒット作を国内の作家の手で作り出すための企画が立ち上げられ、グエン・ニャット・アインの『万華鏡シリーズ』の出版が開始された。このシリーズは都会の中学生の日常生活を、会話を多用した、軽妙かつスピーディなタッチで描いたもので、2002年までの7年間に全45巻が刊行された。このシリーズは狙い通りの人気を博し、作者の他の作品とともに、現在に至るも版を重ねている。ベトナムの児童文学作家で本を出せば常にベストセラーになるような作家は、彼をおいて他にいないと言っていいだろう。

5. おわりに

1980年代末まで、ベトナムの児童書は国家補助金制度の下で、出版活動を保証されていた。当時の年間出版タイトル数は100件程度と、非常に限定されたものでしかなかったが、作家は最低限の生活保証を得て、執筆活動に専念することができた。そのため当時は少数ながら児童文学専門の作家が存在した。しかし現在は本が売れなければ出版社はたちまち経営が危うくなってしまう。また2005年の国際著作権条約への加盟で、童話を始めとする海外の作品の翻訳も急増していて、国内の創作は押され気味である。そのせいか、この10年ほどは成人文学の作家が片手間に児童向けの作品を書くことはあっても、それ専門で

執筆する者はかなり減ってしまった。児童文学と言えばこの人と言えるような作家は極めて少ない。

ところでベトナムには、正統派の文学は北部のものという観念が根強くある。ホーチミン市は18世紀以降に開拓された新開地で、今年遷都1,000年祭を迎えたハノイとは歴史の厚みが違うのだと北部の人々は言う。ホーチミン市には商業主義に毒された娯楽はあっても、文化は生まれないのだと。グエン・ニャット・アインはベトナム中部ホイアンの出身で、現在はホーチミン市に拠点を置く作家である。彼のような作家が、ベトナムの将来を担う若い読者から圧倒的に支持されているということは、近い将来、そうした観念を塗り替える契機になりうるかもしれない。

今回のリスト作成にあたり、ハノイ師範大学附属児童文学研究センター所長のラー・ティ・バック・リーさんから貴重な研究成果を提供していただいた。この場を借りて御礼申し上げますとともに、同センターの URL（ベトナム語、英語）を以下に記してこの稿の締めくくりとしたい。

<http://www.hnue.edu.vn/hoptacquocte.aspx>

（かとう さかえ 大東文化大学准教授）

活動報告

(2010年1月～12月)

1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本の持つ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に一部他機関から借用した資料を交えて、子どもの本・文化に関する展示会を行っている。2010年は、3回の展示会を開催した。

○「日本発☆子どもの本、海を渡る」

[2月20日(土)～9月5日(日) 計161日：入場者数48,318人]

日本の子どもの本は、どんな国・地域で翻訳されているのか、それぞれの国や地域の習慣や文化に合わせて、絵や文にどのような変化が加えられているのか、をテーマに、日本語の原書と30以上の国・地域で出版された翻訳版など合わせて約300点を展示して、日本の児童書の国際的な広がりを紹介した。

<口絵及び本文14～16ページ参照>

○「世界のバリアフリー絵本展—国際児童図書評議会2009年推薦図書展」

[8月21日(土)～9月12日(日) 計20日：入場者数3,885人]

スイスに本部を置く国際児童図書評議会 (IBBY) の日本支部である社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY) との共催。IBBY 障害児図書資料センターでは、2年に一度、世界中から収集した障害児の読書を支援する書籍の中から、推薦図書リスト『**Outstanding books for young people with disabilities**』を刊行している。本展示会は、世界21か国から選ばれた50作品を、実際に手に取って見られるように展示した。

<口絵及び本文18～19ページ参照>

○「絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」

[9月18日(土)～2011年2月6日(日) 計107日：入場者数27,179人]

世界各地で優れた絵本が数多く出版された「絵本の黄金時代」と言われる1920～1930年代。子どもたちに新しい社会の訪れを伝える絵本文化は、とりわけ新しい移民層と共に生きる多民族・多文化社会の絵本を模索したアメリカと、革命後の新しい社会の役割と希望を伝える手段としての絵本を生み出したソビエト連邦で花を咲かせた。当時の両国を代表する作品や、これらに影響を与えた美術潮流を示す作品の他、当時のフランスを代表する作品、これらに影響を受けた日本の作品など、約220点を展示した。

<口絵及び本文16～17ページ参照>

2. イベント

国際子ども図書館では、各展示会期間中、展示内容への理解をより一層深めるため、展示会に関連した講演会やギャラリートークを行うなど、様々な催物を開催している。

○講演会「『ひろしまのピカ』が海を渡ったとき～日本の絵本の翻訳出版に携わって」

[3月6日(土)：参加者69名]



栗田明子氏

「日本発☆子どもの本、海を渡る」展の関連行事として、日本の児童書の翻訳出版の現場で長く活躍してこられた栗田明子氏による講演会を開催した。栗田氏は『ひろしまのピカ』の翻訳出版にまつわるエピソードを中心に、海外の子どもたちに日本の児童書を届けることの意義や難しさについてなどを語った。

○講演会「翻訳は三人四脚 『精霊の守り人』の作者と訳者、大いに語る」

[4月24日(土)：参加者129名]

「日本発☆子どもの本、海を渡る」展の関連行事として、『精霊の守り人』の作者上橋菜穂子氏と、訳者平野キャシー氏による対談形式の講演会を開催した。タイトルの三人四脚の3人目は翻訳先のアメリカの出版社の編集者を意味し、異なる文化背景を持つ現地の読者に物語が抵抗なく受け入れられることを目指す編集者の様々な要望や提案に、作者と訳者がどのように応え、議論と調整を重ねながら翻訳作品を作り上げていったかを、数々の具体例を挙げながら紹介した。

○第17回東京国際ブックフェアへの参加

[7月8日(木)～7月11日(日)]

出版界や図書館・学校関係者、さらに一般利用者による情報交換の場として開催されている東京国際ブックフェアが、東京都江東区の東京ビッグサイトで開催された。今回、国際子ども図書館は東京本館とともにブースを出展し、会場でパンフレットの配布・広報活動等を行った。

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」(第1回)

[6月26日(土)：参加者110名]

国際子ども図書館では、2010年度から社団法人日本ペンクラブとの共催で、世界各国の児童書に関するイベント「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」を開催している。記念すべき第1回は、第1部が「魔女からみた世界の子どもの本」と題する作家の角野栄子氏による講演で、第2部は「いま、台湾の子どもの本は？」と題して児童文学研究者のショウ・イーファン氏と作家の令丈ヒロ子氏が、それぞれ台湾の子どもの本の現在について紹介した。

<本文24～25ページ参照>

○講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」(第2回)

[9月25日(土)：参加者89名]

講演会シリーズの第2回は、「いま、イギリスの子どもの本は？」と題して、イギリスで最も人気のある児童文学作家であるジャクリン・ウィルソン氏による講演と、翻訳家のさくまゆみこ氏との対談を行った。

<口絵及び本文25ページ参照>

○講演会「絵本が運んだ子どもたちへの伝言：1920年代」

[10月9日(土)：参加者106名]

「絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」展の関連行事として、本展示会監修者の島多代氏による講演会を開催した。島氏は当時の児童書出版を支えた編集者の活躍などについて、展示の見どころを交えながら語った。



島多代氏

○読み聞かせ講座「親子で楽しむ昔話」

[10月24日(日)：参加者130名]

10月23日、24日に東京・上野公園周辺で開催された国民読書年記念祭典の一環として、「ことばの杜」の山根基世氏と好本恵氏による、昔話の魅力や読み聞かせの意義についての話を交えての、昔話『ももたろう』の読み聞かせイベントを開催した。

<口絵及び本文20ページ参照>

○第12回図書館総合展への参加

[11月24日(水)～11月26日(金)]

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場である図書館総合展が、横浜市のパシフィコ横浜展示ホールで開催された。12回目となった2010年

は、開館10周年を記念して「国際子ども図書館 10年のあゆみとこれから」と題した特別展示を行い、会場内でパンフレットを配布するなど、国際子ども図書館の広報を行った。

○シンポジウム「絵本の黄金時代 1920～1930年代—アメリカとソビエトを中心に—」

[11月27日(土)：参加者99名]

「絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」展の関連行事として、レナード・マーカス氏とヴェレナ・ラシュマン氏をパネリスト、本展示会監修者の島多代氏をコーディネーターとしてシンポジウムを開催した。1920～1930年代のアメリカ及びソビエトの絵本について、両パネリストからの報告を踏まえて、過去から現在を貫く絵本の根源的な意義をテーマに議論がなされ、児童文学は「子どもたちに生きる力を伝える希望の文学」であるとの位置付けが示された。

<口絵参照>

3. 研修

○児童文学連続講座「日本の児童文学者たち」

[11月8日(月)～11月9日(火)：受講者60名]

全国の各種図書館等で児童サービスに従事する図書館員等を対象として、第7回となる標記講座を開催した。宮沢賢治、新美南吉、金子みすゞ、石井桃子、赤羽末吉という5人の児童文学者について、各講師がその特徴を紹介した。あわせて、日本の児童文学者たちを調べるための当館所蔵資料について、国際子ども図書館職員が講義を行った。当日の配布資料は国際子ども図書館ホームページで公開している (<http://www.kodomo.go.jp/event/evt/bnum/event/2010-05.html>)。また、本講座の講義録は2011年度に刊行予定である。

<本文26～28ページ参照>

○2010年度図書館情報学実習生の受入れ

[8月31日(火)～9月9日(木)：実習生2名]

2010年度図書館情報学実習生を公募し、2名(愛知淑徳大学、聖学院大学)の実習生を受け入れた。2010年度から、実習が必修科目でない大学等からの応募も可能とした。実習生は、国際子ども図書館の業務全般についての講義及びカウンター業務、レファレンス・サービス、子どものへやのディスプレイ作成、読み聞かせ等の実習を受けた。最終日には職員の前で絵本の読み聞かせ実演を行い、国際子ども図書館職員と懇談した。また、9月6日(月)には東京本館を見学した。

4. 児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」での子どもと本を結ぶ取組

<小展示>

以下の箇所で大展示を実施した。表紙を見せて本を展示することにより、多くの子どもたちが興味を持ち、手に取って楽しんでいった。

なお、小展示の資料リストは国際子ども図書館ホームページに掲載し、同内容の印刷物を展示期間中配布している(「世界を知るへや：B」は必要に応じて配布)。

[トップページ>子どものへやから>お知らせ>今月の小展示] 参照

<子どものへや：A>

「とら・とら」(1月)

「おかしの本」(2月)

「始まるよ。楽しいよ。一園と学校の本―」(3月～4月)

「ゴリラとどうぶつえんのなかまたち」(4月～5月)

「雨、あめ ふれふれ」(6月)

「さあ、でかけよう!～山・川・海～」(7月～8月)

「としょかんだいすき!」(9月～10月)

「地面の下にはなにがあるの?」(11月～12月)

<子どものへや：B>

「わくわく どきどき 大ぼうけん」(2009年12月～2010年2月)

「森の本」(3月～6月)

「きょうりゅうの本」(7月～8月)

「木の実とリスの森」(9月～11月)

「火のぬくもりと火のふしぎ」(12月～)

<世界を知るへや：A>

「韓国の子どもたちのお気に入りの本～韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本～」(2009年10月～2010年1月)

「ともだちのほん」(1月～5月)

「学校図書館セット貸出し ヨーロッパワールドカップにちなんで」
(6月～8月)

「『世界のバリアフリー絵本展』関連展示」(8月～10月)

「韓国のおはなし会で人気のある絵本～韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本～」(10月～12月)

<世界を知るへや：B>

「出発進行! 『のりもの』本めぐりへ展関連展示」(2009年7月～2010年2月)

「『日本発☆子どもの本、海を渡る』関連小展示」(2月～9月)

「『絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言』関連展示」(9月～)

また、廊下に面した二つの小窓に、季節や行事に合わせて手作りした折り紙や人形などを本とともに飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

<夏休み読書キャンペーン>

子どもたちに本の魅力を伝えるための企画として「夏休み読書キャンペーン

2010」を行った。本を読んで問題に答える形式で、設問のカードは初級編・中級編・上級編の三つに分けた。延べ1,200名の子どもたちの参加があった。3択問題に加えて、中級編・上級編には記述式の問題も取り入れたため、高学年の子どもたちも満足できる内容となった。

○子どものための催物

<子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から（4歳から小学1年生対象）と午後3時から（小学2年生以上対象）実施した。2010年は合計187回実施し、延べ1,180名が参加した。

おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、参加した子どもには、紹介した本のタイトルなどを記したプログラムと、1回参加するごとにスタンプを押印する「おはなし会カード」を配布している。

<ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会>

3歳以下の子どもとその保護者を対象として、月に2度（第3土曜日とそれに続く日曜日の午前11時から）実施している。

2010年は合計23回実施し、延べ252組560名が参加した。絵本とわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢や個性に合わせたプログラムで行っている。

<子どものためのおたのしみ会>

春休みには、普段のおはなし会の内容を拡大し、対象も4歳以上の1種類だけにして、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施した。2回実施し、50名の参加者を得た。



子どものための春休みおたのしみ会

<子どものための落語会>

こどもの日には、国際子ども図書館で初めて落語会を開催した。

<口絵及び本文19ページ参照>

<科学あそび>

7月31日(土)・8月1日(日)、小学生以上を対象に「科学あそび2010」を各日2回計4回、ホールで実施した。科学読物研究会の坂口美佳子氏を講師に、午後1時半から「でんきのじっけん!～カミナリカードをつくろう」、午後3時からは「ドライアイスのじっけん!～シャーベットをつくろう」を行った。両日合わせて延べ167名の参加があった。

「でんきのじっけん!」では、色々な素材で通電を実験した後、黒画用紙にスパンコールを貼り電気を走らせるカミナリカードを作った。「ドライアイスのじっけん!」ではドライアイスが水に溶ける様子の観察や液体をシャーベット状に凍らせる実験などを行った。

科学の本に対する興味を喚起するために、実際に行った実験や発展的な実験が掲載されている児童書を紹介した。また、ホームページに活動紹介を掲載した。



でんきのじっけん!



ドライアイスのじっけん!

○子どもの見学

<通常の見学（団体向け）>

1月から12月までに、23件540名の見学を実施した。内訳としては、保育園、幼稚園3件142名、小学校9件282名、中学校8件82名、養護学校2件21名、インターナショナルスクールや日本語学級1件13名である（10月末現在）。

館内見学、おはなし会、調べ学習の援助、職業インタビューなどを希望により組み合わせ対応している。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れるケースもあったが、できる限りの対応をした。

<夏休み子ども向け図書館見学ツアー>

夏休み期間中は通常の子供向け見学に代えて、個人で参加できる見学ツアーを実施した。対象は小学生以上で、内容は1時間程度の館内見学に限定している。7月27日、8月3日、10日、17日（午前・午後）、24日に全6回実施し92名が参加した。見学終了後は「子どものへや」で行っていた読書キャンペーンへも誘導し、図書館の利用に効果的につなげることができた。

8月18日(水)には、「日中韓子ども童話交流事業」*の一環として、日本、中国、韓国の子どもたち98名と随行者46名の見学を受け入れた。一行は、建物や



日中韓子ども童話交流事業

展示会を見学し、「子どものへや」や3階ラウンジで読書を楽しんだ。

* 「子どもゆめ基金」の活動の一環として、子どもの未来を考える議員連盟、独立行政法人国立青少年教育振興機構により「日中韓子ども童話交流事業実行委員会」が組織され、交流事業を行っている。

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する知識の本とその国の絵本や物語および原語の絵本など約50冊をセットにして、全国の学校図書

館に貸し出すサービスである。2010年4月からはこれまでの利用校からの要望などを踏まえ、従来1か月間であった貸出期間について、学校等が国際子ども



学校図書館セットを活用する岩手県
岩泉町立釜津田小学校

図書館（東京都台東区）から遠距離に位置するなど特別な理由がある場合は、それを超える期間も選べるようにした。また、ホームページでは、セットに含まれる資料のリストや解題を掲載するとともに、セットを使って学校図書館活動や学習・読書活動を進めた実例を全国から集め、活用事例として紹介している。

2010年1月からは、「中東・アフリカセット」（小学校高学年向け）を加え、全部で7種類のセットとなった。2010年には、延べ144校に計6,722冊の資料を貸し出した。2011年1月からの貸出開始に向けて、新たに「中南米セット」（小学校高学年向け及び中学校向け）を構築した。

5. その他の活動

○第8回国際子ども図書館連絡会議

[6月16日(水)]

国際子ども図書館の2009年度の活動について報告し、2010年度の取組等について国際子ども図書館と協力関係にある諸機関から意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。大阪国際児童文学館、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省（生涯学習政策局社会教育課、初等中等教育局児童生徒課、スポーツ・青少年局）の13機関・団体が参加した。

6. 刊行物

- ・展示会「日本発☆子どもの本、海を渡る」展示解説本
- ・展示会「絵本の黄金時代 1920～1930年代—子どもたちに託された伝言」展示解説本
- ・『国際子ども図書館の窓』第10号*
- ・『平成21年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「いつ、何と出会うか—赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」』*
- ・利用案内：一般向け、子ども向け（日本語、英語、ハンゲル、中国語）
- ・リーフレット「絵本ギャラリー」
- ・リーフレット「たてもの探検」
- ・リーフレット「学校図書館セット貸出し活用事例の紹介—本を読んで世界を知ろう」*
- ・国際子ども図書館メールマガジン



* 国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp>) に PDF 版を掲載している。

これから…

○展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」

[2011年2月19日(土)～]

国際子ども図書館初の長期の展示会です。当館所蔵資料の中から、明治から現代までの時代をいろうった代表的な児童文学作家・画家の作品を紹介します。また、児童文学者コーナーでは著名な児童文学者の作品を半年ごとに入れ替えながら紹介します。

その他にも、年間を通して様々な行事を企画します。詳しくは当館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) やメールマガジンでお知らせしていきます。

数字で見る！ 国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計 (2010年9月30日現在)

資 料 区 分				2010.9.30現在 所 蔵 数		
資 料 情 報 課	図 書 (単位：冊)	日本語	児童書 (*1)	222,782		
			児童書関連書、参考図書	16,281		
			小 計	239,063		
		外国語	児童書 (*1)	欧米言語	49,042	
				アジア言語	22,136	
			児童書関連参考書	4,006		
			小 計	75,184		
	計	314,247				
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	1,307	
				児童関連誌	780	
			外国語	児童雑誌	欧米言語	44
					アジア言語	30
				児童関連誌	欧米言語	100
					アジア言語	6
		小 計	2,267			
	新聞	日本語	12			
		外国語	1			
非図書資料 (*2) (単位：枚数及び 物品数)	静止画、紙芝居 (*3)		18,377 (1,552)			
	カード、カルタ (*3)		10,594 (173)			
	マイクロフィルム		1,932			
	マイクロフィッシュ		35,924			
	音楽資料 (レコード、CD、カセットテープ) (*4)		1,814			
	映像資料 (ビデオテープ、ビデオディスク)		5,794			
電子資料 (光ディスク、磁気ディスク)		5,826				
児 童 サ ー ビ ス 課 (*5)	図 書 (単位：冊)	日本語	18,447			
		外国語	2,744			
		小 計	21,191			
	逐次刊行物 (単位：タイトル)		21			
	非図書資料 (単位：点)		305			

- *1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む
- *2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む
- *3 括弧内はタイトル数
- *4 教師用指導書のみ (児童用音楽資料は未所蔵)
- *5 児童サービス課分には、学校図書館セット貸出し用資料を含む

(2) 来館者統計

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
開館日(日)	23	22	24	24	24	25	26	25	24	26	22	21	286
来館者(人)	8,650	7,985	12,326	12,414	11,876	9,613	9,700	11,901	9,616	11,782	9,117	6,886	121,866
うち中学生以下(人)	1,494	1,185	1,915	1,783	1,488	1,241	1,553	2,523	1,207	1,438	1,148	913	17,888
1日平均(人)	376	363	514	517	495	385	373	476	401	453	414	328	426
中学生以下1日平均(人)	65	54	80	74	62	50	60	101	50	55	52	43	63

(3) 各室利用統計

カウンター・室		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
第一資料室	開室日(日)	19	18	21	20	19	21	22	20	20	21	18	17	236
	利用者(人)	625	629	738	591	701	678	681	750	674	605	611	552	7,835
	1日平均(人)	33	35	35	30	37	32	31	38	34	29	34	32	33
第二資料室	開室日(日)	19	18	21	20	19	21	22	20	20	21	18	17	236
	利用者(人)	351	408	470	306	434	399	400	507	392	437	375	297	4,776
	1日平均(人)	18	23	22	15	23	19	18	25	20	21	21	17	20
子どものへや・世界を知るへや	開室日(日)	23	22	24	24	24	25	26	25	24	26	22	21	286
	利用者(人)	4,808	4,127	5,796	5,635	5,721	4,642	5,492	7,065	5,089	6,130	4,485	3,416	62,406
	1日平均(人)	209	188	242	235	238	186	211	283	212	236	204	163	218
	大人(人)	3,445	3,108	4,232	4,078	4,232	3,474	3,753	4,704	3,865	4,669	3,449	2,426	45,435
	1日平均(人)	150	141	176	170	176	139	144	188	161	180	157	116	159
	中学生以下	1,363	1,019	1,564	1,557	1,489	1,168	1,739	2,361	1,224	1,461	1,036	990	16,971
メディアふれあいコーナー	開室日(日)	23	22	24	24	24	25	26	25	24	26	22	21	286
	利用者(人)	3,321	3,194	5,052	4,802	4,286	3,561	4,223	6,183	4,020	4,159	3,072	2,471	48,344
	1日平均(人)	144	145	211	200	179	142	162	247	168	160	140	118	169

※本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

(4) 資料出納統計

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
第一・第二資料室	件	1,125	942	1,395	1,051	1,348	979	1,101	1,109	829	826	1,013	893	12,611
	点	2,742	2,530	3,655	2,504	3,117	2,193	2,057	1,865	1,860	1,954	2,111	2,242	28,830

(5) 複写サービス利用統計

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
来館申込み	件	666	534	621	406	613	317	420	433	375	298	509	442	5,634
	枚	4,067	3,410	3,808	2,166	4,940	1,939	1,896	2,775	2,077	2,160	2,768	1,893	33,899
	コマ	21	7	223	10	15	0	0	0	0	0	0	21	297
遠隔申込み	件	117	89	135	61	31	23	15	40	68	91	58	45	773
	枚	306	314	299	280	90	385	53	215	202	207	258	172	2,781
	コマ	0	12	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32
計	件	783	623	756	467	644	340	435	473	443	389	567	487	6,407
	枚	4,373	3,724	4,107	2,446	5,030	2,324	1,949	2,990	2,279	2,367	3,026	2,065	36,680
	コマ	21	19	243	10	15	0	0	0	0	0	0	21	329

(6) 資料貸出統計

種別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
国会議員・国会関係者(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
行政・司法相互貸出し(点)	4	10	3	5	9	1	0	8	2	7	1	0	50
図書館間貸出し(点)	31	34	29	25	36	29	37	21	28	30	33	13	346
学校図書館等児童書貸出し(点)	1,742	40	0	851	0	2,238	0	44	793	960	0	54	6,722
展示会出品資料貸出し(点)	2	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
職員貸出し(点)	0	218	0	0	0	0	0	0	72	2	4	3	299

(7) レファレンス処理統計

1) 文書レファレンス

月	処理 文書 (通)	処理 (件)									合計
		情報源・文献紹介			簡易な事 実調査	特定資料の調査				利用案内 ・その他	
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計		
1月	13	7	0	7	3	10	2	2	14	5	29
2月	8	5	0	5	2	6	6	5	17	2	26
3月	12	3	1	4	0	11	2	1	14	4	22
4月	9	5	0	5	0	6	3	1	10	6	21
5月	4	3	1	4	0	4	2	4	10	2	16
6月	7	4	0	4	0	6	1	4	11	3	18
7月	11	4	0	4	0	10	5	4	19	5	28
8月	11	10	1	11	0	10	4	3	17	3	31
9月	9	4	0	4	0	5	1	1	7	5	16
10月	4	1	0	1	0	1	1	3	5	4	10
11月	10	8	0	8	0	8	3	4	15	5	28
12月	11	8	0	8	3	7	2	5	14	6	31
計	109	62	3	65	8	84	32	37	153	50	276

2) 電話レファレンス

月	受理 (件)	処理 (件)									合計
		情報源・文献紹介			簡易な事 実調査	特定資料の調査				利用案内 ・その他	
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計		
1月	64	4	3	7	1	5	29	1	35	73	116
2月	98	8	1	9	8	0	31	1	32	90	139
3月	100	2	3	5	7	3	21	3	27	99	138
4月	99	5	2	7	5	4	19	0	23	93	128
5月	106	13	5	18	1	5	27	4	36	88	143
6月	129	10	6	16	7	3	27	7	37	120	180
7月	156	10	10	20	8	4	35	5	44	169	241
8月	175	8	2	10	7	4	32	10	46	175	238
9月	124	5	4	9	8	5	20	9	34	124	175
10月	114	12	5	17	8	4	17	5	26	122	173
11月	98	2	2	4	5	3	15	6	24	111	144
12月	98	10	3	13	5	3	33	6	42	86	146
計	1,361	89	46	135	70	43	306	57	406	1,350	1,961
(うち18 歳未満)	6	3	2	5	1	0	2	1	3	3	12

※2010年から企画協力課の処理件数も加算。

3) 口頭レファレンス

月	受理 (件)	処理 (件)												合計
		情報源・文献紹介			簡易な 事実調 査	特定資料の調査				利用案内・その他				
		情報源・ 文献紹介	類縁機 関案内	小計		書誌的事 項調査	所蔵 調査	所蔵機 関調査	小計	利用案内 ・その他	機器操 作支援	検索援助 (機器以外)	小計	
1月	712	30	10	40	5	1	84	12	97	680	42	7	729	871
2月	646	42	4	46	3	5	63	21	89	660	28	1	689	827
3月	941	67	4	71	8	7	77	6	90	972	27	1	1,000	1,169
4月	730	47	13	60	6	11	97	9	117	669	29	3	701	884
5月	823	35	12	47	2	7	139	34	180	742	41	4	787	1,016
6月	855	69	11	80	8	11	134	31	176	781	39	22	842	1,106
7月	809	68	14	82	13	13	129	28	170	725	40	25	790	1,055
8月	982	73	15	88	19	6	128	44	178	867	46	35	948	1,233
9月	923	54	12	66	21	11	111	56	178	812	42	29	883	1,148
10月	1,004	53	18	71	12	5	92	37	134	988	21	13	1,022	1,239
11月	835	63	15	78	7	4	79	26	109	798	37	13	848	1,042
12月	685	62	12	74	13	6	69	15	90	636	19	17	672	849
計	9,945	663	140	803	117	87	1,202	319	1,608	9,330	411	170	9,911	12,439
(うち18歳未満)	760	92	4	96	4	4	219	39	262	525	18	53	596	958

※2010年から企画協力課の処理件数も加算。

(8) 参観・見学統計

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
件数(件)	13	17	17	11	17	22	19	31	18	23	18	19	225
人数(人)	136	160	130	87	151	266	207	452	201	319	212	321	2,642
(うち18歳未満)(人)	48	18	12	0	45	52	66	154	54	67	73	246	835

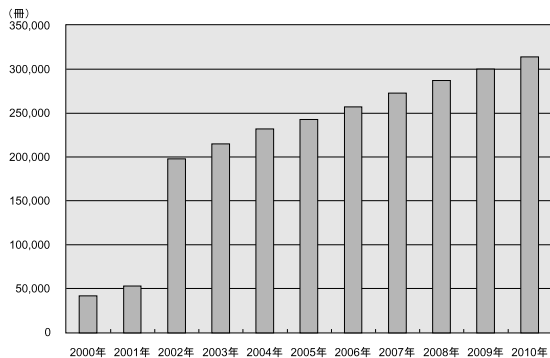
(9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
トップページ [日本語版]	24,239	23,649	26,682	28,459	28,279	27,747	29,248	28,881	25,450	26,680	23,612	23,798	316,724
トップページ [英語版]	679	626	786	605	630	576	556	642	534	570	486	464	7,154

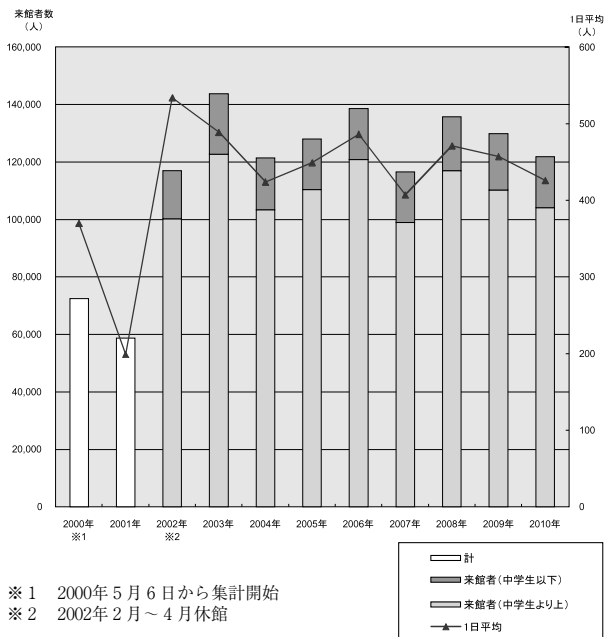
グラフで見る！ 国際子ども図書館 2000年～2010年

国際子ども図書館の歩みを、グラフで御紹介します。

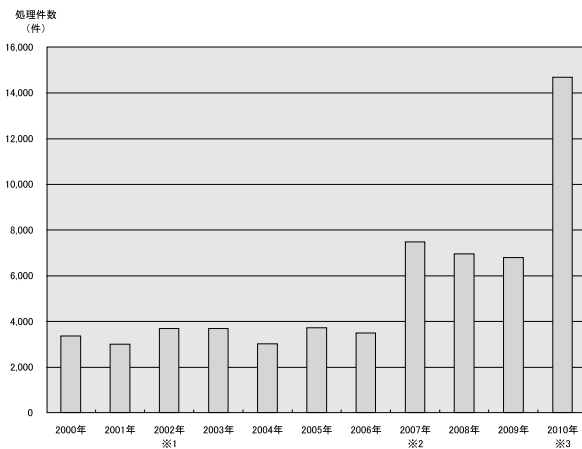
【グラフ1】所蔵統計（図書）



【グラフ2】来館者統計

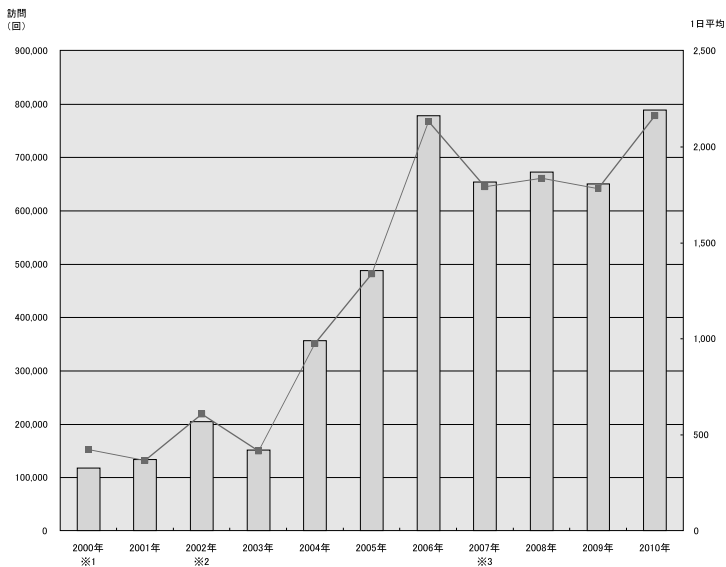


【グラフ3】レファレンス処理統計

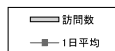


- ※1 2002年2月～4月休館
- ※2 「子どものへや」処理件数も加算
- ※3 企画協力課の処理件数も加算

【グラフ4】ホームページアクセス統計



- ※1 2000年3月28日～12月31日
- ※2 2002年2月は開館準備中のためカウントなし
- ※3 2007年9月～12月システム障害で採取不可



国際子ども図書館利用案内

ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 問い合わせ先：企画協力課 ホームページ > ご利用の案内

どなたでも利用できます(ただし、第一資料室・第二資料室は満18歳以上の方)。

開館時間 9:30~17:00 資料請求 9:30~16:30 (於 第一資料室・第二資料室)

休館日 月曜日、国民の祝日・休日(こどもの日は開館)、年末年始(12月28日~1月4日)、毎月第3水曜日(資料整理休館日)

休室日 休館日のほか、以下の日が休室日となります。

2階 第一資料室・第二資料室：日曜日

3階 本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

所蔵資料 国内で出版された児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・雑誌等 ※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 資料情報サービス > レファレンス・コーナー

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせにお答えします。

◆申込方法：来館、文書、電話

※資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、及び聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆資料の複写(有料) 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > 来館してのご利用

ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > ご自宅やお近くの図書館からのご利用

◆申込方法：来館、NDL-OPAC 経由(登録利用者のみ)、郵送

☆資料の図書館間貸出し 問い合わせ先：資料情報課情報サービス係

ホームページ > 資料情報サービス > 利用案内 > 図書館員の方へ

「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー 問い合わせ先：企画協力課企画広報係、児童サービス課児童サービス係

<一般向け> ホームページ > ご利用の案内 > 見学・ツアー

<児童・生徒向け> ホームページ > 子どものへやから > 児童・生徒向け見学のご案内

☆学校図書館セット貸出し 問い合わせ先：児童サービス課企画推進係

ホームページ > 学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し

テーマごとに50冊前後で構成する資料のセットを学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページで御覧いただけます。

『国際子ども図書館の窓』

第1号～第10号総目次

(左から記事名、執筆者名、ページ番号)

※全号、国際子ども図書館ホームページで全文を御覧いただけます。

第1号 (2001年3月)

口絵 国際子ども図書館開館		
国際子ども図書館について	戸張 正雄	2
『国際子ども図書館の窓』発刊にあたって	亀田 邦子	3
国際子ども図書館開館記念特集—開館記念式典より—		
皇后陛下のお言葉		4
祝辞	バーバラ・シャリオット	8
国際子ども図書館が誕生するまで	和中 幹雄	12
「子どもと本と読書」—国際子ども図書館開館記念シンポジウム— (抄録)		15
IBBY コロンビア大会参加記	亀田 邦子	45
活動報告 (2000年5月～12月)		48
世界の児童書—コレクション紹介—		55
数字で見る! 国際子ども図書館		56
これから…		60
利用案内		61

第2号 (2002年3月)

口絵 国際子ども図書館全館オープンへ		
はじめに	富田 美樹子	2

国際子ども図書館のシンボルマークが決定！		3
全面開館に向けて		4
①施設案内 ②これからのサービス		4
プランゲ文庫児童書展に向けて	山崎 美和	9
世界の児童書一蔵書紹介 アンデルセン『新・お話と物語』ほか3冊—池田宣政（南洋一郎）	杉山 きく子	10
コレクションから—		
国際子ども図書館の見学	企画協力課企画係、資料情報課児童サービス係	14
国際子ども図書館建物の話	市原 美奈子	18
国際子ども図書館ミュージアムの展開	服部 比呂美	19
「絵本ギャラリー」への招待 絵本ギャラリー「絵本は舞台」アンケート調査結果	山口 和人	25
投槍像裏話	市原 美奈子	30
アジア地域との連携へ向けて—アジア児童図書館員会議2001から—	佐藤 尚子	31
活動報告（2001年1月～12月）		33
上野図書館の戦前と戦後	市原 美奈子	40
数字で見る！国際子ども図書館		41
これから…		46
利用案内		47

第3号（2003年3月）

口絵 全面開館を迎えて		
はじめに	富田 美樹子	2
特集 国際子ども図書館全面開館		
国際子ども図書館全面開館記念行事		3

なぜ今、昔話なのか 国際子ども図書館全面 開館記念展示「不思議の国の仲間たち—昔話 から物語へ—」から	服部 比呂美	8
子どもの読書の状況と国際子ども図書館	堀川 照代	11
おはなし会のこと	山岸 和美	15
世界の児童書—蔵書紹介 ウイニングトン—イン グラムコレクションの魅力	神宮 輝夫	16
トロント公共図書館オズボーンコレクションを 訪ねて	永野 祐子	21
セット貸出物語—国民文化祭「理想の学校図書 館」顛末記より—	山本 美千枝	22
出張報告 国際児童図書館と IBBY 大会	富田 美樹子	25
出張報告 ICDL シンポジウムに参加して	山口 和人	28
児童書総合目録事業の展開について	資料情報課情報サービ ス係	31
国際子ども図書館の外国の児童書（第二資料室 から）	江口 磨希	33
活動報告（2002年1月～12月）		34
数字で見る！国際子ども図書館		41
これから…		46
利用案内		47

第4号（2004年3月）

口絵 国際子ども図書館活動風景		
はじめに	富田 美樹子	2
「国際アンデルセン賞の軌跡」シンポジウム報 告		3
「国際アンデルセン賞の軌跡」によせて	島 多代	5
展示会「未知の世界へ—児童文学にえがかれた 冒険—」	展示班	8

児童サービスの現場から	島本 まり子	13
特集 あなたの「思い出の1冊」探します！—国際子ども図書館のレファレンス・サービスーストーリー・レファレンスを中心に	資料情報課	14
忘れられないレファレンス	杉山 きく子	22
世界の児童書—蔵書紹介— 国際子ども図書館		
ロシア語児童書コレクション—田中かな子旧蔵資料を中心に	松谷 さやか	24
学校図書館セット貸出しの開始から1年が経過して（報告）	児童サービス課	28
活動報告（2003年1月～12月）		34
数字で見る！国際子ども図書館		42
これから…		46
利用案内		47

第5号（2005年3月）

口絵 国際子ども図書館行事風景		
はじめに	富田 美樹子	2
展示会「蓮の花の知恵—インドの児童文学」の概要		3
アジアと子どもの本	松居 直	4
「国際子ども図書館児童文学連続講座—当館所蔵資料を使って」を終了して	企画協力課協力係	7
「外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報」—出版情報の収集と発信—	資料情報課	9
旧ユーゴスラビアの児童文学	田中 一生	11
フランスの児童図書館の現状—5年間の選書リストから—	末松 氷海子	18
ちいさな子どものための絵本の時間	見形 宗子	25
ケニアの村に図書館をつくる	福本 友美子	26

出張報告 ポローニャ・ブックフェア参加記	千代 由利	29
世界の児童書一蔵書紹介― 国際子ども図書館 洋雑誌コレクションから―『セント・ニコラ ス』―	千代 由利	32
活動報告 (2004年1月～12月)		34
数字で見る! 国際子ども図書館		42
これから…		46
利用案内		47

第6号 (2006年3月)

口絵 国際子ども図書館の2005年		
はじめに	村山 隆雄	2
シンポジウム報告 バリアフリー図書の普及を 願って―図書館と出版の協働		3
第一部 基調講演「やさしく読める図書の出 版―スウェーデンの経験から」	ブロール・トロンバック	5
第二部 報告と討論から	攪上 久子	13
展示会「ロシア児童文学の世界」	「ロシア児童文学の 世界」展示班	19
展示会「ロシア児童文学の世界」に寄せて 「パリ―モスクワ」児童文学の交流	末松 氷海子	23
平成17年度「児童文学連続講座―当館所蔵資料 を使って」を終了して―総合テーマ「日本児童 文学の流れ」―	企画協力課協力係	28
世界の児童書一蔵書紹介― 国際子ども図書館 コレクションから「ちりめん本」	江口 磨希	30
国際子ども図書館ホームページのリニューアル	企画協力課企画広報係	31
児童書デジタルライブラリーと児童書総合目録 の公開資料拡大	資料情報課	32

出張報告 マレーシア、タイ、インドの図書館 訪問記	増田 利恵	34
福岡から上野に来て	坂梨 秀子	36
活動報告 (2005年1月～12月)		37
数字で見る！国際子ども図書館		45
これから…		50
利用案内		51

第7号 (2007年3月)

口絵 国際子ども図書館の2006年		
はじめに	村山 隆雄	2
展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子ども の本」	「もじゃもじゃペー ターとドイツの子ども の本」展示班	3
上野の森に、いたずらっ子たちがやってきた— 「もじゃもじゃペーターとドイツの子ども の本」展に寄せて—	吉原 高志	6
展示会「北欧からのおくりもの—子どもの本の あゆみ」	「北欧からのおくりも の」展示班	11
北欧の子どもの本—その豊かな世界	福井 信子	13
旧帝国図書館建築100周年記念行事	企画協力課企画広報係	17
イングラム・コレクションで学ぶ、初期のイギ リス絵本	吉田 新一	19
遠くから眺めるハンガリーの児童図書事情	深谷 ベルタ	26
セミオーダーで承ります—子ども向け見学—	児童サービス課	32
絵本ギャラリー「江戸絵本とジャポニズム」 「子 どもの本 イメージの伝承」提供開始	企画協力課企画広報係	35
平成18年度「児童文学連続講座—当館所蔵資料 を使って」総合テーマ「絵本の愉しみ—イギリ ス絵本の伝統に学ぶ—」を終了して	企画協力課協力係	36

活動報告 (2006年1月～12月)	38
数字で見る！国際子ども図書館	47
これから…	52
利用案内	53

第8号 (2008年3月)

口絵		
はじめに	齋藤 友紀子	1
2007年のハイライト		
科学をテーマに：展示会「大空を見上げたら —太陽・月・星の本」	「大空を見上げたら」 展示班	3
展示会「ゆめいろのパレットⅢ—野間国際絵 本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリ カ・ラテンアメリカから」	「ゆめいろのパレット Ⅲ」展示班	6
講演会「多文化社会における児童書・児童 サービス」—アルダナIBBY 会長を迎えて—	企画協力課企画広報係	8
平成19年度児童サービス連絡会—児童サー ビスの実際と課題—	児童サービス課	11
コラム 大好きな本に出会おう！—子どもの へや・世界を知るへやの小展示—	石川 真理子	15
児童文学連続講座「絵本の愉しみ—アメリカ 絵本の展開—」	企画協力課協力係	16
電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテ ンツ「モダニズムの絵本 日常の中の芸術」	企画協力課企画広報係	18
特集：世界を知る		
ポーランドの児童書事情	小原 雅俊	19
オランダ・ベルギーの児童書	野坂 悦子	24
コラム ボローニャブックフェアでの出会い から	藤代 亜紀	29

エジプト、イランの児童書出版と児童サービス	酒井 貴美子	30
調査・研究報告		
戦中期「講談社の絵本」の〈子供知識絵本〉	吉田 新一	33
活動報告（2007年1月～12月）		38
数字で見る！国際子ども図書館		47
これから…		52
利用案内		53

第9号（2009年3月）

口絵 国際子ども図書館の2008年		
はじめに	齋藤 友紀子	1
2008年のハイライト		
展示会「チェコへの扉—子どもの本の世界」	「チェコへの扉」展示班	3
「チェコへの扉」展によせて	村上 健太	5
2006年度国際アンデルセン賞・IBBY 受賞オーナーリスト展	「IBBY オーナーリスト2006」展示班	8
展示会「童画の世界—絵雑誌とその画家たち」	「童画の世界」展示班	9
平成20年度児童サービス連絡会—学校図書館への支援の実際と課題—	児童サービス課	12
児童文学連続講座—「日本の昔話」	企画協力課協力係	16
電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ「アメリカの絵本 黄金期への幕開け」	企画協力課企画広報係	18
「子どもと本の内外情報」発信中	企画協力課協力係	18
国際交流		
子どもと本をつなぐ人々との出会い—ミュンヘン国際児童図書館&第31回IBBY世界大会見聞記—	小沼 里子	19

出張報告：カナダの子ども読書推進活動とそれを支える組織	水戸部 由美	22
コラム 世界の訪問者との出会いから	中野 怜奈	25
調査・研究報告		
イランの児童図書	愛甲 恵子	26
ラテンアメリカ（スペイン語圏）の児童書	神戸 万知	31
コラム 童話のふるさと	宮川 健郎	36
活動報告（2008年1月～12月）		38
数字で見る！国際子ども図書館		47
これから…		53
利用案内		54

第10号（2010年3月）

口絵 国際子ども図書館の2009年		
はじめに	齋藤 友紀子	1
2009年のハイライト		
展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」	「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」展示班	3
展示会「出発進行！『のりもの』本めぐりへ」に寄せて—鉄道博物館からの資料	佐藤 美知男	6
展示会「ゆめいろのパレットⅣ—野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」	「ゆめいろのパレットⅣ」展示班	8
世界をつなぐ子どもの本—2008年度国際アンデルセン賞・IBBY オナーリスト受賞図書展	「世界をつなぐ子どもの本」展示班	10
本の城—本と子どもと大人をつなぐ場所	ガンツェンミュラー 文子	11
平成21年度児童サービス連絡会—公共図書館への支援の実際と課題—	児童サービス課	15

児童文学連続講座「いつ、何と出会うか—赤ちゃん絵本からヤングアダルト文学まで」	企画協力課協力係	19
いつ、何と出会うか—平成21年度児童文学連続講座の2日間—	宮川 健郎	20
電子展示会「絵本ギャラリー」の新規コンテンツ『『コドモノクニ』掲載作品検索』	企画協力課企画広報係	22
国際交流		
韓国国立子ども青少年図書館との交流事業		
1. 韓国国立子ども青少年図書館との業務交流	網野 美美	23
2. 小展示交流「韓国の子どもの気持ちに入りの本—韓国国立子ども青少年図書館が選んだ子どもの本」	児童サービス課	24
「読書人の国を造る」ことを目指す人たち～ローマ・ミラノ出張報告	小林 直子	26
調査・研究報告		
タイの子どもの本事情	竹内 より子	28
イスラエルの児童書	母袋 夏生	33
活動報告（2009年1月～12月）		38
数字で見る！国際子ども図書館		48
これから…		53
利用案内		54

国際子ども図書館の窓 第11号 2011.3

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 2011年3月1日発行
編集責任者 齋藤 友紀子
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No.011 March 2011

Contents

【Frontispiece】	
【Upon the 10th anniversary of the ILCL】	Makoto Nagao 1
【To nurture hope in children】	Yukiko Saito 2
【The 10th anniversary of opening of the ILCL】	
Toward the next ten years	Yukiko Saito 4
Expectations of the ILCL	Teruyo Horikawa 9
Exhibitions and events to celebrate the 10th anniversary and the National Year of Reading	14
【Highlights of 2010】	
The ILCL providing information through the Internet ... Mariyo Igarashi	21
Series: What's happening with Children's Books in the World?	Planning and Cooperation Division 24
The ILCL Lecture Series on Children's Literature—Japanese writers of children's literature.....	Takeo Miyakawa 26
Pictures added to "Kodomo no Kuni" magazine article search in the Picture Book Gallery.....	Planning and Cooperation Division 29
【International exchange】	
Building a Book Culture—International Conference on Children's Libraries, New Delhi, India	Mariko Ishikawa 30
Out into the world, ask fellow librarians for advice!: visit to Sweden	Naoko Kobayashi 32
The 32nd IBBY World Congress	Maki Aoyama 34
Exchange programs with the National Library for Children and Young Adults in Korea ...Planning and Cooperation Division and Children's Services Division	36
【Column】	
Momotaro and the Russian Revolution: Swedish-language edition of Momotaro printed on crepe paper	Kimiko Sakai 38
【Research reports】	
Turkish Children's literature	Saori Katagiri 39
Children's books in Vietnam	Sakae Kato 44
【ILCL activity report】	49
【Schedule】	60
【ILCL in figures】	61
【ILCL in graphs】	66
【ILCL user guide】	68
【Complete list of contents of "The Window" No.001~010】	69

NATIONAL DIET LIBRARY
Tokyo